

医 学 史
-------

## 高橋琢也と学生達（疾風怒濤の物語）（4）（下）

友 田 燐 夫  
Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

**【要約】** 大正7年を迎えると学生達が危惧していた徴兵忌避問題が現実のものとなってきた。明治維新後に制定された徴兵制度では大学や専門学校に学ぶ学生達（いわゆる学徒）は徴兵が免除されていた。大正5年5月に日本医学専門学校を総退学した四百数十名の学生達には大正6年秋以降はその特典が消失していた。学生達は徴兵によって東京医学講習所での学籍がいつ奪われてもおかしくない状況であった。徴兵免除の最終期限は大正7年4月14日とされていた。東京医学講習所は正規の専門学校でなかったため、高橋琢也の進める東京医学専門学校の文部省による認可が焦眉の急となってきた。一方では立教大学における医学部設立構想が頓挫した大正7年2月12日以降も文部省専門学校局長・松浦鎮次郎は高橋琢也の進める東京医学専門学校を決して認可しようとしなかった。このような逼迫した状況の中で、高橋琢也は淡々と東京府東大久保の地に新医学校の建設を進め、一方では文部省に申請書類を提出し認可を求めるとともに、政界の有力者に支援を求め各界の協賛者に寄附を依頼していった。そのクライマックスは大正7年4月6日に訪れた。本稿では、学生達の徴兵忌避問題と、東京医学専門学校が4月11日に承認されるまでの3ヶ月余の出来事を日を追って記述する。

### 目次

1. はじめに
2. 東京医学専門学校設立のための敷地購入と新校舎建築
3. 中濱回生病院購入と移築について
4. 学生団の再結成と新医学校設立への関与
5. 上野における絵画頒布会による資金調達活動
6. 文部省主導による立教大学医学部設立問題（以上前号および前々号）
7. 学生達の徴兵忌避問題とその顛末
8. 東京医学専門学校認可に至るまでの高橋琢也の苦闘
9. エピローグ

### 7. 学生達の徴兵忌避問題とその顛末

立教大学医学部設立問題は米国におけるライフスナイダー立教大学総理らの募金活動が不調に終わ

り、大正7年2月12日<sup>1)</sup>に消滅した。これとは別に東京医学講習所に学ぶ学生達には徴兵忌避問題が内在していた。学生達は大正5年5月に日本医学専門学校を総退学して以来、大正6年3月までは一応

平成22年12月21日受付、平成23年1月24日受理

（別刷請求先：〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1 東京医科大学生化学講座 友田 燐夫）

徴兵免除がなされていた。それは日本医学専門学校で得られた学徒免除の資格が継続しているものとみなされていたからであろう。明治維新後に制定された徴兵制度では、専門学校や大学に学ぶ学生達には徴兵免除を付与されており、総退学した学生達にもその恩恵が与えられていた。しかしながら、大正6年4月以降はその特典も消滅したことから、学生達の半数近くは他の私立専門学校や私立大学に籍を置いて、徴兵を回避していた。また、残りの学生達は徴兵検査を受けずに東京医学講習所へ通学していた。東京医学講習所は文部省より専門学校として認可されていなかったため、大正6年秋頃より学生達には徴兵忌避で憲兵隊によって逮捕されるのではないかという不安が増幅していった。本部会記録<sup>2)</sup>には「第四回本部会議 大正六年十一月十二日 吾人はやがては学校設立さるる事は信ずれども、要は時期の問題なり。少なくとも来年二月には医師試験を受けたし。不幸に更に延期する事あれば、四月には徴兵検査に逢着した数の犠牲者を出すべし。然る時学生は大動揺をなし将に不利の結果となる。」「第二十八回本部会議 大正七年一月二十七日 徴兵猶予問題に就き。愈期日が接近し、学生等不安を抱き始めた事。」と書かれてある。大正7年3月になると、その問題は大きくなっていった。3月14日に学生達の一部が新宿や赤坂の憲兵隊分署により出頭を命じられ、尋問を受けることとなった。新聞は3月29日、3月30日に、「東京医学講習所学生達の徴兵忌避」あるいは「徴兵忌避により憲兵に逮捕される」などの見出しで大きく報道した。これにより学生達の不安は現実のものとなり、高橋琢也の進める東京医学専門学校の新規設立が急がれた。しかしながら、文部省専門学校局長・松浦鎮次郎は東京医学専門学校の設立を頑として認めようとしなかった。大正7年4月14日は学生達の徴兵忌避問題の最終期限であり、それまでに新医学校が文部省により認可されていなければならないという事情があった。4月14日を過ぎれば、医学生が全員徴兵され、東京医学専門学校そのものが成り立たないことになる。このような逼迫した状況下でも高橋琢也は淡々と東京医学専門学校設立のために東京府下東大久保の地に新校舎建設(写真1-3)を進め、一方では東京府庁および文部省に新医学校設立認可申請書を提出した。大正7年の高橋琢也日記<sup>3)</sup>や本部会記録<sup>2)</sup>にはこれらの状況が生々しく記述されている。以下、



写真1 東大久保における新校舎



写真2 東大久保における新校舎

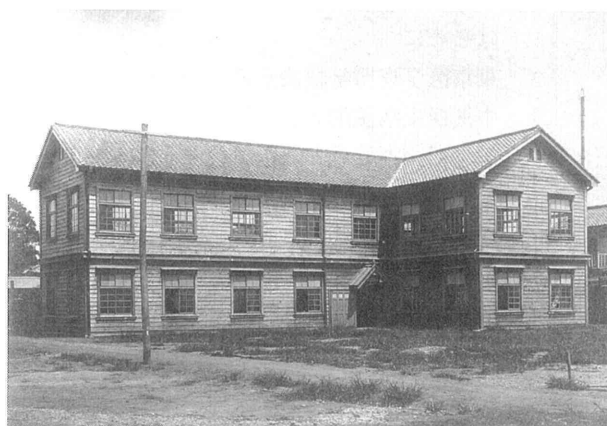


写真3 東大久保における新校舎

本章では大正7年1月から医学生達の徴兵問題に関するこれらの記述について日を追って説明する。

高橋琢也日記<sup>3)</sup>には「大正七年一月七日 朝より後藤大臣、海軍大臣、陸軍大臣。ラサ島会社、内務

省、文部省。」「一月十日 昼より内務大臣、農工貯蓄、東北電化、三菱、宝田、花井卓三、秋本、順天堂。」「一月十八日 原、政友本部。陸軍大臣へ行く。」「三月十日 山本、鎌田、波多野、陸軍大臣、三會堂。」と記載されている。

高橋琢也は大正7年1月7日にはまず、憲兵隊を統括する後藤新平内務大臣を訪問している。そこでは学生達の徴兵忌避問題について話されたと推測される。なぜなら、高橋琢也はこの日、加藤友三郎・海軍大臣、大島健一・陸軍大臣らを次々と訪れているからである。いずれも、学生達の徴兵忌避問題に関して相談と依頼を行なったものと考えられる。なお、後藤新平、加藤友三郎、大島健一らは高橋琢也とは懇意の間柄であった（後藤新平、加藤友三郎は大正6年には東京医学専門学校設立のための協賛者として既に署名していた）。

3月29日の高橋琢也日記<sup>3)</sup>には「三月二十九日雨天。朝七時、自動車にて浅野総一郎、山下亀三郎、西村直、小田柿捨次郎、朝吹常吉、白石直次（参百円寄附）、後藤内相、大嶋陸相、渡辺修（百円也寄附）」と書かれてある。このように、徴兵忌避問題が新聞によって報道された日（3月29日）に後藤新平内務大臣と大島健一陸軍大臣を訪問しているが、この問題について善処を要請したものと考えられる。

学生達も2月5日、20日および3月14日の本部会において徴兵問題について検討している。とくに、3月14日にはとうとう憲兵隊（新宿分署）が東京医学講習所に来て、学生達を分署まで呼び出し、尋問を行なったことが本部会記録<sup>2)</sup>に記録されている。

第二十九回本部会議 大正七年二月五日 午後七時 永住館下座敷に於て開会

徴兵猶予問題に関し、何とかして我が東京医専に於て猶予が出来る様、希望を述ぶ。

臨時会議 大正七年二月二十日 午後一時 緊急事項ありて参集す。

徴兵猶予の必要上、認可申請書類作成其他協議事項ある故、明二十一日午後六時迄本部員一同を招集すること。

第四十二回本部会議 大正七年三月十四日 午後七時半開会す。

徴兵問題（藤中）

十四日午後三時頃、学校へ憲兵来りて呼出さる。而して徴兵猶予の事に関し、色々に質問を受く。

依って其理由を具さに語り、二枚半程聞き取り書を書かる。我々の境遇に同情を表されたる様子なるも、問題は漸次拡大せし傾向あり。患う可きなり。

3月18日の本部会では、本部会学生委員の寺師順一が憲兵隊に呼び出され尋問されたことを報告した。またその晩、本部会学生委員・青山剛一は高橋琢也を訪問し、高橋より「徴兵問題に関しては、皆が検査を受けると云うことに一定したら、大臣其他連隊長に懇願してやっても良い。」と言われている（本部会記録<sup>2)</sup>）。しかしながら、実際は前述のように高橋琢也は1月初めより内務大臣、陸軍大臣、海軍大臣や憲兵隊には事情を伝え、情状酌量を願っていた。このことは学生達には伝えられていない。

第四十三回本部会議 大正七年三月十八日（月曜日）午後七時十分開会

徴兵問題（寺師順一）

私も憲兵隊に出頭して色々訊問を受けたり。曰く、「原籍、現住所、目下の状態、是迄徴兵猶予の有様や、保証人は誰なるか。或は今年は猶予する積りか等種々質問を受けて帰りたり。」

決議事項

徴兵問題

本問題に関し、本部の意向としては、之れに対する処置を各個人に任せるより詮なかる可し。第一徴兵忌避罪として、起訴せらるるが如き場合は、其の上官若しくは当局者に懇願すること。

高橋先生の話

同夜十一時、高橋先生訪問の顛末（青山剛一）

徴兵問題に関しては、皆が検査を受けると云うことに一定したら、大臣其他連隊長に懇願してやっても良い。然らずんば私が徴兵忌避罪を幫助するような意味にとれるから、余り口出しはしたくない。依て認可を急がす可く、明後日あたり文部省へ出頭して陳述せん考えなり。

高橋琢也はこの日の発言通り、3月29日には後藤新平内務大臣を、4月1日には再度、陸軍大臣・大島健一や内務大臣・後藤新平を訪問して学生達の徴兵忌避問題の善処を頼んだ。高橋琢也日記<sup>3)</sup>には「大正七年四月一日 好天気。朝より陸軍大臣、内務大臣、関、憲兵分所。」と書かれてある。憲兵隊を統括する後藤新平内務大臣から学生達の徴兵忌避

への情状酌量の確約がとれたことから、高橋琢也はその足で憲兵隊分署を訪問し穩便に扱うよう頼んだ。

遡って、大正7年3月27日にはとうとう学生達の徴兵忌避問題が新聞に報道されてしまった。以下は本学会記録<sup>2)</sup>に記載されている当時の新聞記事の抜粋である。

大正七年三月二十七日 報知新聞夕刊

徴兵忌避。学生二百六名を検挙す。

新宿憲兵分隊にては徴兵検査を企てし学生二百六名を過日来検挙し中、百六十名は近く相当の処分を行わゆる筈也と云う。右は多く元日本医学専門学校の生徒にして彼の高橋琢也氏を創立委員長とする東京医学専門学校に入学すべく、其の開校を待ちつつあるものなるが、目下同校は猶講習所名義にて徴兵猶予特典なき所より物理学校法政大学其他に入学手続きを執りしが、時々申訳的に登校するのみなりしが、近く学校当事者と生徒との間に紛擾起りし処より、端なくも憲兵隊の知る所となれるものに二百六十名の大部分は事情を酌量し、行政処分を以て検査を受けしむる事となるべく、徴兵令に依り厳罰に処するものもある筈なり。猶平素登校せざる学生に対し徒に徴兵猶予の証明書を与えたる学校に対しても陸軍側にては相当処罰の望み居れり。

▽結局は学校に戒告か。松浦(鎮次郎)局長談

右に付き、松浦専門学務局長は曰く、「その事に関しては未だ何等の報告も来ていないが、年々一人や二人づつはあった事である。それを以て、全部を直ちに徴兵忌避に云々は余りに早まって居る様である。殊にあの医学専門学校というのは未だ学校ではなく、一の講習所で、文部省には届出も無い一の集団である。是迄にも病気の為、高等学校を一年間休学して静養中を忌避に問うわれたり、又入学試験に落第した為め、一時他の専門学校に入学して又の受験を待って居るものなどが一も二も無く忌避と認められた例も度々あって兎角立場の違う所から、徴兵官の方にも誤解がある様だ。恐らく今度のものもそんな大袈裟なものではあるまいと思うが、若し徴兵忌避の事実があったとしても万一学校で明かに事情を知って居たとすれば、本省

は断然たる処罰を行うが、学校としてもその判別は全く困難で、結局は戒告位のものに止まるであろう。」と。

上記のように、松浦局長は学生達の徴兵忌避問題については荒立てはしていない。しかしながら、この時期においても東京医学講習所そのものを認めておらず(上記下線)、東京医学専門学校の承認は絶対反対の立場を貫いていた。

東京日日新聞(大正7年3月29日)

◎徴兵忌避を企てし学生の大集団

赤坂憲兵隊に検挙さる二百数十名の非国民

◇東京医学専門学校の生徒

中学卒業の不良学生が単に徴兵猶予の目的を以て私立専門学校に学籍を置き、一箇月に三四回の出席或は同級生に依頼して出席点呼に応ぜしむる非国民的奸手段を講ずる者夥しく憲兵隊の監視嚴重なるに拘らず今年徴兵期に際し

◇同様手段の忌避者激増の傾向

あり。憲兵隊にては茲に大活動を開始して検挙に着手し、既に赤坂憲兵分隊及び新宿同分遣所の手にて検挙せる者百数十名に達し、目下厳密に取調中とて、忌避者を収容する私立大学等は頗る大恐慌なりという。而して右忌避者のうち二百数十名は元本郷区駒込千駄木町日本医学専門学校生徒なり。同校学生は大正五年同校の開業試験免許の特典運動の際、同校長磯部檢蔵氏の◇排斥を為して能わず、市会議員秋虎太郎、医学博士佐藤達次郎両氏の応援を得て、同年五月四日十八名同盟退校し、両氏は牛込区神楽町東京物理学校に東京医学専門学校と称する一校を設け、是等学生を収容したり。されど、同校は元より徴兵猶予の特典なければ生徒等は同年度こそ既に日本医専の猶予特典に拠って徴兵猶予となりたれ。翌年六月よりの忌避一策に窮し、漸く一策を案じ、昨年の春以来数校の私立大学其の他の専門学校に学籍を入れ、不出席の俣、其校と成すまし、難なく漸く忌避の目的を達し、同年七、八月の夏季休暇後は最早や徴兵期の経過し居るに乘じ、

◇無届退校して月謝を省き更に

本年度に入るや改めて同様の手段に出て、旨々徴兵を免れんとせしものにて、現在在學生百四十余名及同卒業生約七十名を数え何れも憲兵隊の手に検挙されたる次第なるが、同隊の調ぶる処に拠れ



ば、同校は物理学校借入当時、及び本年一月東大久保の新築校舎に引移り、元沖縄県知事高橋琢也氏が創立委員長たる後も医術教授の設備なく全く医学校としての実を有せざりしと。尚憲兵隊にては忌避行為に対しては此の場合、峻厳の処置を為すべしという。

男らしく検査を受けよ——と勧めたが

創立委員長 高橋琢也氏 談

「憲兵隊の取調があった事は事実である。然し、学生は現在は東京医学専門学校ではなく、東京医学講習所であって、講習生は物理学校、法律学校生徒が講習に来るだけで、学籍の如何と云う事まで私は立入って彼は云う訳にはゆかぬ。けれども、事実上或いは其の在籍、学校へ出席するというも満足に出来ていない矛盾があるかも知れぬが、日本医専を四百数十名が同盟退学したのには大いに理由がある。私は何も関係もないが、前途を憂えた結果、石黒男、博士佐藤達次郎博士、三宅秀博士、高橋男等に相談の末、献身的に東京医学専門学校を創立する決心をし、東北、北海道の地所を初め骨董等の動産不動産を売払い、既に校舎病院の建物は出来上り、佐藤博士が校長及病院長となることになり、文部省へ認可を願ひ出て、来月一日前後に許可になることになったので、陸軍省でも生徒の徴兵関係に就き大いに同情して下すっている筈です。先日も徴兵問題で学生が来たから、変なことをして猶予などするより断然男らしく検査を受くるように勧めて置いたが、何分多人数の事であるから中に何様者がいるか夫れは判らぬ。」

事実ならば嚴重に取締らん 田所文部次官の談  
「初耳だ。よく調べて見ねば判らぬが、事実なら学生も学校も嚴重に処分せねばならぬ。恐らく学校では知らずにいたことと思うが、若し知っていたとすれば徴兵忌避幫助で嚴罰に処すべきである。学生に斯る悪風があることは実に面白からぬ事で十分取締りはしているが一層嚴重にせねばならぬ。」

捨置けぬ大問題—外国に対しても恥かしい

◇文部省と相談をして何かとしたい  
ものだ 一戸陸軍大将の談

病床にありし教育総監一戸大将は憤然として床上に起き直って語るらく、  
「実に怪しからぬ事である。欧州の大戦乱の為め

には英米両国の自由国ですら徴兵令を布いて国民がどんどん徴兵されている此の場合に

◇ — 東洋の強国とか

◇ — 尚武の国民とか

誇っている我国の、而も青年学生の中に多数の徴兵忌避者を出さんとするのは誠に以ての外のある。欧州戦争は今や東洋の天地に波及せんとしている大切の際に斯かる不祥事を見る事は外聞の悪い事だ。

◇ — 国民思想上から

◇ — 見れば 従令一人

の徴兵忌避者でも国家の大問題である。殊にそんな大勢の忌避者を出すとは何とも恥かしい次第であるばかりでなく斯る思想上の欠点があるというのは捨て置けぬ事で遺憾の極である。文部省ともよく相談をして何とかしたいものである。

万朝報新聞（3月29日）

◎徴兵忌避二百余名

東京医学講習所学生憲兵分署に召還さる  
近來徴兵忌避を企つる者少からず。赤坂憲兵分隊にて注意中の所、此程に至りて、牛込なる東京医学講習所の在學生中徴兵猶予を利用して忌避を企つる者ある由を探知し、三百余名をして召喚して取調ぶる所なりたり。右に付、分隊長は語、「徴兵忌避を企てだしたのは本月十三日頃からの事である。元來同校では徴兵猶予の特典がない為、他の学校に籍を置いているものが多いとの事を最初当所で聞き込んだので、調査してみると思ひがけなく二百余名からの忌避者があった。其中重い者は百六十名で、残りの四十名は直に還して了った。併し是等の青年は何れも前途があるので、行政処分を行うことは情に於て忍びない。兎も角行政処分は一時見合わせる事にして夫々説諭して徴兵検査を受けさせることとした。云々。

上記下線のように学生達の徴兵忌避を摘発したのは赤坂と新宿の憲兵分署であった。しかしながら、憲兵隊は決して学生達を犯罪者扱いにはせず、穩便に済ませようとした。ここにも既に高橋琢也の配慮が浸透していたと考えられる。

東京夕刊新報新聞（3月29日）

◎東京医専生の徴兵忌避 数百名検挙さる

日本医学専門学校生徒は大正五年中同校の開業試

験免許の特典運動の際、同校長磯部檢蔵氏の排斥運動を起したのが能わず、秋市議員、佐藤医学博士等の応援を得て、同年五月四日十八名が同盟退校し、次いで高橋琢也氏の義侠に依り、東京医学専門学校を設け四百数十名は日本医専を同盟退学して学校に一小波乱を惹起した事は未だ記憶に残っている処であるが、其後高橋氏は私財悉くを投じて献身的に是等学生を救い佐藤博士行掛上校長を承認し、来月一日前後には文部省よりの認可が下る事となっている処が当時同盟退学を企てた学生仲間には徴兵を猶予又は忌避せんとする非国民的手段を謀らんでいるものがあつた。然も本年の徴兵期に望んで是等学生間には忌避者の激増して来た。其の手段は勿論専門学校に学籍を置いて月三回出席し、辛くも徴兵を逃れようとするものであるが、中等教育を享けた輩であるから却々巧妙なものである。其処で憲兵隊は先頃来秘かに彼等の行動を内偵して遂に証拠充分となつたので赤坂分隊及び新宿分遣所に命じて大活動を行なつた。結果、今や数百名検挙され嚴重な取調を受けている。是が為め、従来忌避者の巢窟とも云うべき二三私立大学は新学期に至らんとする今日此の事あるは最も大打撃である。憲兵隊では此際嚴重に処罰して是非非国民を根底から掃蕩するとの事である。

大正7年3月30日 大阪毎日新聞

徴兵忌避者数百名 東京憲兵隊の大検挙  
何れも不良学生にして大多数は元の日本医学専門学校生徒  
中学卒業の不良学生が徴兵猶予の目的を以て、私立専門学校に学籍を置く者最近非常に多く、東京憲兵隊にては此程より検挙に着手し、既に赤坂憲兵分隊、同新宿分遣所の手検挙せる者数百名に達し、目下嚴密に取調中にて、之等忌避者の内二百数十名は元本郷区駒込千駄ヶ谷（正しくは千駄）木日本医学専門学校生徒なるが同校学生は大正五年、同校の開業試験免許（正しくは免除）の特典運動の際、同校長磯部檢蔵氏の排斥をなして能わず、東京市議員安芸（正しくは秋）虎太郎、佐藤達次郎両氏の後援を得て、同年五月四百十八名は同盟退校し、両氏は牛込神楽町東京物理学校に東京医学専門学校（正しくは東京医学講習所）と称する一校を設け、右学生を収容したり。然れ

ども同校は素より徴兵猶予の特典なければ、同年度こそ日本医専の猶予特典に依りて徴兵猶予となりたれども、翌年六月より如何とも詮方なきより茲に一策を案じ、昨年の春以来数校の私立学校其他の専門学校に学籍を入れ、無出席の俣其校の学生として忌避の目的を達し、同年七八月頃の夏季休暇後は最早徴兵期の経過せるより無届退校して月謝を省き、更に本年度に入り改めて同様手段に出て、徴兵を免れんとせしものにて憲兵隊にては忌避行為に対して此の場合峻嚴なる処置をすべしと云う。

東京日日新聞（大正七年四月六日）

◎学生の徴兵忌避事件愈々検事局に回付さる。  
一昨日書類のみを憲兵隊より送致。誤つて罪に  
触れし者は寛大の処置

徴兵忌避を試みたる東京医学専門学校生徒二百余名に対しては憲兵隊に於て取調中なりしは既報の如くなるが、昨日事件を纏めて書類だけ検事局に送致せり。これにつき某検事は曰く、「まだ書類を見ないから断言出来ぬが、之等学生は、軍人となるその事を嫌うにあらずして、学問の期間だけを避けようとするのではあるまいか。体格さえ立派であつたならば一度は検査を受けて出なればならぬ。忌避し果せようなどは国法から到底免れぬのである。今回の忌避嫌疑者に対しては審理に審理を重ね、謝つて罪となる可き者に対しては危険思想の無い限り有為の青年を徒に罰するも刑事政策上面白くないから、成丈け実刑を科さぬ方がよからうと思うが、徴兵令違犯の事実が歴然たるものがあれば、法は之を罰せねばならぬ。何れにしても事件は簡単だ。又、今度新しく立た法律即ち二十一歳になれば如何なる境遇にあるも検査を受けねばならぬという事が実施されると今度の様な間違いはなからう。」云々。

このような学生達の徴兵忌避問題を抱えたまま、高橋琢也と学生達は文部省による東京医学専門学校認可の日を待ち続けた。とくに前述のように学生達の徴兵免除の最終期限は4月14日であつた。しかし高橋琢也が文部省へ提出した東京医学専門学校認可申請書が認可手続完了に到るには少なくとも一週間はかかることから、逆算すると4月6日か7日までに認可のめどがつかないならなかつた。

高橋琢也は3月25日の東京日日新聞の記事の中で、「文部省は4月1日までに認可することになっている」と述べている。しかしながら、4月1日になってもその連絡はなかった。

#### 8. 東京医学専門学校認可に至るまでの高橋琢也の苦闘（大正7年1月～4月11日）

高橋琢也は大正6年11月に文部省に東京医学専門学校設立申請書（大正6年10月の日付）を提出していた。それに対して文部省は回答せぬまま立教大学の医学部設立を推し進めようとした。大正7年に入ると立教大学側が医学部設立を強く推進することを決意したこと<sup>4)</sup>、状況は予断を許さなくなっていた。そのため高橋琢也は新年早々より頻繁に文部省へと足を運んだ。一方では年初には東大久保の敷地内に新医学校の建物の一部が完成した。そこで高橋琢也の出席のもとに東京医学講習所の始業式が行われた（1月14日）。また、この時期同敷地内で新病院の建設が始まっている。この間、高橋琢也は女婿の竹下文隆に依頼して、東京府庁および文部省への追加の提出書類の作成を急がせた。

2月12日になり立教大学医学部設立問題が米国における募金活動が不調のため消滅した。また、山根正次や磯部検蔵が経営する日本医学専門学校の状態は極端に悪化したことから、立教大学による買収を含めてその行方が取りざたされるようになった。このような状況下にあっても文部省専門学校局長・松浦鎮次郎は高橋琢也が進める東京医学専門学校の設立を承認しようとしなかった。そこには臨時教育会議の有力メンバー・山根正次（日本医学専門学校理事長・衆議院議員）の圧力があつたことが見え隠れする<sup>4)</sup>。本章では大正7年1月初めより4月11日の東京医学専門学校認可に至るまでの経緯を高橋琢也や学生達の精力的な活動や高橋と松浦鎮次郎局長との壮絶なやりとりを絡めながら、高橋琢也日記<sup>3)</sup>と本部会記録<sup>2)</sup>をもとに述べる。

高橋琢也は大正7年の年明けより、文部省を頻繁に訪れている。とくに三井財閥と関係が強かった田所美治文部次官を訪れ、寄附趣意書への添え書きを要請した。それを携えて高橋琢也は三井財閥（団琢磨、有賀長文、早川千吉郎ら）、三菱財閥、古河財閥（中島久万吉）、久原財閥（久原房之助）や東洋汽船（山中隣之助）らを訪問し、大型寄附を請願した。高橋琢也は政友会（山本条太郎、原敬ら）にも

足繁く訪問し、文部省への働きかけを要請した。また、金子堅太郎（子爵）を訪れ立教大学医学部設立の進行状況を聞き出した。年初より林権助（駐中国公使）や嘉悦孝子（私立女子商業学校のち嘉悦大学設立者）を二度も訪れているがその目的は不明である。それらの様子は高橋琢也日記<sup>3)</sup>に連日記載されてある。

高橋琢也日記・大正七年一月九日 朝より林権助、嘉悦孝子、松浦（鎮次郎）局長、団（琢磨）、明渡知、馬越恭平（五百円也）、山本（条太郎）、勸業西村、佐々木政吉、松原（一一）、竹下（文隆）、池上（作三）、医学生。

一月十二日 朝より林権助、田所（美治文部次官）、山中隣之助、取引所角田、山本（条太郎）、杉野（百円也）、紅葉館。

一月十四日 大風。九時、医学講習所・始業式に望む。田所（美治）より電話来る。三井の有賀（長文）に逢う。川崎（銀行）より参拾円出。

一月十五日 晴天。午後より三井行く。有賀（長文）に逢う。台南精糖、政友会本部、原（敬）へ行く。

一月十六日 早川（千吉郎）、中橋（徳五郎）、金子（堅太郎）行く。

一月十九日 農商務省、山中隣之助、嘉悦（孝子）、田所（美治文部次官）、繁盛館へ行く。沖縄県会副議長・仲田徳三。

二月四日 三井会社、久原会社、三井本家、山本条太郎、中島（久万吉）、団（琢磨）、金子（堅太郎）、波多野承三郎、早川（千吉郎）、田所（美治文部次官）。

高橋琢也は前年（大正6年）11月に文部省に対して新医学校設立申請書を提出していたことは既に述べた。この書類の作成には高橋の女婿の竹下文隆が全面的に関わっていた。竹下文隆は東京府庁にも同様の書類を提出し、その認可を仰いだ。なぜなら新医学校の設立には東京府庁と文部省の両者の認可が必要であったからである。また、この時期文部次官・田所美治だけは東京医学専門学校認可の方針を打ち出していた。次の大正7年2月7日<sup>4)</sup>の本部会記録にはそれらのことが詳しく記されてある。

第三十一回本部会議 大正七年二月七日 午後三時 四谷永住館に於て開会

△報告事項

二月六日午後七時高橋先生訪問

其一 高橋先生訪問 (中本富太郎)

(a) 認可申請の件

既に認可申請は昨秋十一月中提出せり。昨今東京府庁に於て「是ならば宜し」と云い無事に通過せり。次は文部省なり。此際、高橋先生の履歴書並に北海道、青森の土地謄本を添え提出せよとの内命あれば、目下取急ぎ其の準備中なり。

文部次官の談

嘗て (田所美治) 文部次官の談として、立教大学との合併、日本医専の買収は共に困難なれば、先ず文部省にては東医に認可をやる心算なり。(事茲に至れば詮なし。止む事を得ず認可を与えんと意向)。依つて余は早晚認可の来る可きものと信ず。

財団は金貳拾萬円として願ひ出す。

(b) 日医買収の件

先生は「それは至難なりと思う」と云わる。

三井重役会議

(c) 「三井には既に慈善事業の機関として、三井病院を設立せり。故に同じ方面に向つての寄附行為は面白からず。特に医育に関し出金するの必要なし」とは重役会議の結論なり。

然し其後、高橋先生に深く同情を寄せられ、中に運動する者あり。其結果何等縁故なき医学校に向つては出金出来ぬも、以前先生が三井に対して尽くされた御好意に酬い、先生に応分の寄附をなす可しと。然る上は先生の意思に任せ、学校に投ずるとも、他の事業に出資すると、先生の勝手たるべし。但し寄附金額は未定なり (筆者註：最終的には三井財閥よりは早川千吉郎の名前で 1,000 円の寄附が寄せられた)。

(d) 学校敷地は之れを切半して他に貸す意見なりや? 先生曰く、「今日の状態にて放置するは不経済なり。故に彼の土地を割き、学校、病院に関係ある建物を立てさせる積りなり。因に学校用地としては千七百坪。」

例ば、学校 — 寄宿舎、擊劍柔道道場

病院 — 入院申込所、休憩所

(e) 運動場の必要なきや? 曰く、「当分空地に於て行い、若し金が出来れば他の所に運動場を設くるも可なり。

(f) 次の建築物は何日頃着手するか? 曰く、「近々御料林より払下げし材木を敷地へ持ち行きて、建築にかかる可し。まあ見て居れ。」と云わる。

(i) 寄附金募集の爲め、先生には京阪地方へ今月十五日頃赴かる可し。

(j) 自分が或る協賛員の所に行きし所、寺尾 (亨) 博士も自分の中学の爲め寄附金を懇請し居れりと。

(k) 先生には「文部省は何日頃認可を呉れる積りか」と云う。最後の確答を得可く、本日文部省に出頭せしも、文部大臣並に次官は閣議の爲め不在なりき。(筆者註：この時期、高橋琢也は頻繁に文部省に出向き、東京医学専門学校の認可を催促している。)

(l) 第二校舎建築費は二、三日中に支払う積り。又顕微鏡代価は明日にも支払わん。

(m) 日本医専学生を収容する事に就ては、先生の方の諸交渉略決定した上に於て行わんとす。之れ本部の意向なり。先生に於かれては本部と同じ意見を有すと。

(n) よしや、立教との合併問題成立すとも、我に於ては如何にしても本校の名儀を以て認可を得る考えなりと、先生語る。

其二 竹下 (文隆) さん訪問 (長委三美)

二月七日午後一時、難波 (静夫) 君と共に国論社を訪う。(竹下文隆の談では) 先に医学校増設に付、許可して呉れぬかを、願書に認め、文部省に差出した (筆者註：大正 6 年 11 月提出書類のこと)。

認可申請書 (此事に関し詳細に亙りて後日誌さん)

今度更に認可申請書を文部省に呈出す。其の内容に三種あり。次の如し。

申達書 認可請願書 寄付行為

a. 目的 b. 名称 c. 事務所

d. 財団目録

1. 基本財産 (土地、十三万円余)

2. 普通財産 (学校、病院、建物、器械、器具、六万円余)

e. 理事人名

△学校の方は貳萬円、病院の方は參萬円にて火災保険に附せり。△認可請願したのは、昨秋十一月半ばなり。△実習室の設計図を早く呈出

するように頼まる。

大正7年2月8日には高橋琢也は国会で松浦鎮次郎と会談しているが、認可の承諾を求めたと考えられる。松浦は書類の中の財産目録の金額が少ないことを常に指摘した。

高橋琢也日記・二月八日 十二時より高橋光威訪問、議会にて松浦局長に面談。

高橋琢也日記・大正七年二月十日 午後より宗像の葬式。芝清正寺。夜七時、松浦（鎮次郎）局長邸へ行く。十二時帰り。

この日は夜7時より12時近くまで高橋琢也は松浦鎮次郎邸で相談を行なっているが、その内容は明らかでない。

高橋琢也日記・二月十二日 文部省次官の添書を受く。三菱に行き、米沢に会い、添書を渡す。三井に行き、有賀（長文）、福田に会す。

高橋琢也の要請によって田所文部次官は三菱および三井財閥宛ての添書を快く書いてくれた。その添書を持って高橋琢也はこれらの会社を訪問したのである。

前述のように東京医学専門学校の設立が文部省に承認される前に、東京府庁で承認されていなければならなかった。それ故、高橋琢也は東京府庁に申請書類を提出していた。本部会学生・川目鉄太郎はその調査に東京府庁を訪れた。その経緯は第三十二回本部会議（大正7年2月14日）で報告された。下線のように、東京府庁を訪れた川目鉄太郎と江並猛は畑事務官より好感触を得て戻って来た。

本部会記録二月十四日（木）午後七時

東京府庁訪問（川目鉄太郎）

昨日、東京府庁畑事務官に電話かけ、本日午前十時頃、江並（猛）氏と共に行き、畑事務官に会う。

畑事務官の談

事務官曰く、「府庁では書類が皆出てくれば、全部認める事に決し居る。何か書類の不備の点ありて目下文部省と府庁との間を往復しているらし。」と。次に「高橋先生の寄付行為全部済みしか」を聞かす。故に我等は「全部済みしなる可し」と答え置きたり。併せて今春徴兵猶予の事もあれば、

来る三月には必ず認可し下さる様に懇願す。（其際、応接の態度、非常に好意を以って話さる。序で関係書類を見んとて卓上のベルを鳴らし、給仕を呼ぶ。給仕は目下其方の係りの人不在なるを伝う）。因に不備の点ありとは寄付行為を意味す可く、往復中とは目下訂正中と解釈するを至当と考えらる。

2月15日には政友会総裁・原敬より東京医学専門学校設立資金への寄附（500円）がなされた。高橋琢也は2月8日に続きこの日も高橋光威（政友会、衆議院議員）を訪れている。高橋光威は原敬の信任厚く政友会の実務を担当していたことから、高橋琢也は種々の相談を行なったものと考えられる。また、高橋光威が東京医学専門学校開設時に評議員となったことから推定すると、高橋琢也はその依頼も併せて行ったのであろう。

高橋琢也日記・二月十五日 原敬入五百円也。中島久万吉、高橋光威。

一方、青山剛一、川目鉄太郎、江並猛らの本部会学生達は2月16日に東京府を再度訪問したが前回の畑事務官が不在のため、岩佐事務官と対談し、申請書類の中の「寄附行為」の意味や、今後の段取りについて質問した。この段階で学生達は都庁や文部省への申請書類の処理が進んでいることを理解するようになった。

第三十五回本部会議 大正七年二月十六日（土曜日）午後七時半開会す。

△報告事項

東京府庁訪問（青山剛一）

本日、川目（鉄太郎）、江並（猛）の両氏と共に東京府庁を訪う。

生憎畑事務官在らず。依って岩佐と云う人に会う。寄附行為とは何を意味するかを訊ぬ。曰く、「多分北海道の所有地謄本を指すならんと。而して目下願書は当庁に出て居らず。先きに徴兵猶予願の件も一緒に出した方得策たる可しと注意したれば持ち帰られしならん。高橋先生の履歴書は不要なり」と語る。愈々書類一切是で完備せしとならば、東京府庁は一応学校の方へ行き調査し、然る上文部省へ進達する考えなりと。



学生達は前々日(2月16日)の都庁訪問を受けて、竹下文隆を訪れた。

第三十六回本部会議 大正七年二月十八日(月曜日) 午後七時半 永住館にて開会

△報告事項

竹下(文隆)氏訪問(佐多正蔵)

一昨十六日午後九時、学生五人にて竹下氏を訪問す。而して認可申請の件に付、尋ぬ。曰く、「認可申請は目下着々遣りつつあり。」と。学生側より、「実は東京府庁に行きて調べ見し所、其の申請書類に於て不備の点あるらし。」と詰る。竹下氏大に面喰い且つ大に怒る。依って「探偵に行きしにあらず。宜しく御願ひする意味に於て行きたるなり」と弁明す。

寄附行為に就いては北海道所有地の謄本が来れば完成する理なり(夫れは五日間以内に於て整う可しと)。正式の願書が文部省に到達すれば、文部省は直ちに認可す可しと思わると語られたり。猶徴兵猶予の事に関し、今夜遅くも其の書類を認め、明朝早々府庁に届け出ざる心算なりと云う。

又、特別教室の設計図は寧々我方より請求すべきなり。

大正七年一月調

△東京医学専門学校財産目録

権利之部

△基本財産

- (一) 地所 — 室蘭 坪数 壱万二千九百十四坪 価格 拾万九千百四拾円也 (内訳) 宅地 三反九畝十三歩 畑 一反二畝十六歩 六番地畑 二町八反〇拾六歩 七番地畑 三反三畝九歩 一番地畑 六反五畝十歩

右は築港の海岸直上地にして 製鋼所と製鉄所との中央なり。先般拾萬円の売買に就き仮契約せし地所なり。

- (二) 地所 — 所在 — 旭川 坪数 壱万二千九百二十三 坪 価格 貳萬五千八百四拾八円 右は元鉄道用地にして旭川停車場

の接続地区 計金 拾參萬四千九百八十八円

△普通財産

- (一) 学校校舎 二階建 一棟 二百三十坪 価格 貳萬円也
- (二) 附属病院 二階建 三棟 二百五十坪 価格 參萬円也
- (三) 学校用具 机、腰掛、及帽子掛、黑板、ストーブ、時計其他雜具一切 四百二十五点 価格 參千八百円也
- (四) 標本価格 金壱千貳百円也
- (五) 解剖図 三百二十本 価格 九百六十円也
- (六) 顕微鏡其他生理器械 模型 医療器械 価格 四千二百五十円也
- (七) 参考書籍 価格 壱千五百円也
- (八) 附属病院用具 ベッド 其他戸棚等一切 価格 四千五百円也
- (九) 学校門番所 平屋四坪 価格 三百九十円也

計金 六万六千六百元也

総計金 貳拾萬壱千五百八十八円也

文部省へ提出された申請書類は上記のものであり、財産としては20万1,588円としてある。のち、4月上旬の最終段階になって松浦鎮次郎局長はこの金額は少ないとして、突然30万円まで上乘せするよう高橋琢也に要請した。

学生達は頻繁に東京府庁を訪れ、申請書類の不備を調査していたが、竹下文隆はそれに対して不快感を表した。

第三十八回本部会議 大正七年二月二十五日(月曜日) 午後七時半開会

△報告事項

同時に又学生側の方にも、設計図、並に学則を早く出して呉れと依頼を受く。序でに、東京府庁に行きし旨を語る。同氏(竹下文隆)「又行ったのか」と大に怒らる。而して「府庁に行く支けは止めて呉れ」と頼む。三井、三菱の寄附金の事に就き尋ぬ。既に出す事になってる旨を答う。久原(房之助)も目下交渉中なりと。

△第一、認可申請の件(中本富太郎)

先頃、竹下（文隆）氏上野都座楼上来り、山本（仁）君と談ず。其時の話に由れば「本部（会）の人達は一体我儘だ。向方から依頼したる時は、其催促峻烈だが、此方から頼んだ事は、期日を経過するとも一向頓着ない」と云う不平の口吻であった。依って三月二日の晩、中本（富太郎）、山本（仁）の両君、竹下氏を訪問して、遅延を来たした理由を述べて了解せしめた所。三月三日中には是非仕上げて呉れと依頼を受く。

三月三日、本部を訪し所、誰一人居ず、次に後藤（哲雄）氏の宅を訪問せし所是又不在なりき。病院開設に従事する、医員、看護婦、薬局員、小使等の人員に就き、池上（作三）先生の意見を尋ね、次に田沢博士の意向を求めし所、両者相合致す。依て、其事や、水の検査、土質検査等の書類を一纏めにして今夜五時竹下氏の許に届け出たり。只、欠点としては、佐藤（達次郎）、中濱（東一郎）両博士の履歴書未着の分と、設計図の青写真出来ぬと丈けなり。之等未完成のものは出来次第至急届け出ざる事にせり。

立教大学医学部設立構想は米国における寄附活動が不調であったことから、その話は消滅した（大正7年2月12日）<sup>4)</sup>。それにもかかわらず松浦鎮次郎局長は高橋琢也の進める東京医学専門学校の設立を認可しようとしなかった。また、経営が悪化した日本医学専門学校を高橋琢也が進める新医学校と合併させることに関しては局長が反対した。

高橋琢也日記・大正七年二月二十六日 松浦専門局長、日本医専の合併はだめと云う。電話にて。九時頃より衆議院、

3月4日には高橋琢也は順天堂医院に佐藤達次郎を訪問し、東京医学専門学校の校長と病院長の要請をした。佐藤達次郎はそれを快諾した。この時点で、東京医学専門学校の陣容が決定されたといえる。高橋琢也はこの日の3月4日付で文部省に再度、東京医学専門学校設立認可の申請書を提出した（写真4参照）。この申請書には開校日を4月1日として記載されていた。2日後の3月6日には佐藤達次郎よりお礼の蒸し物が一箱送られてきた。

高橋琢也日記・三月四日 佐藤達次郎、有賀、原

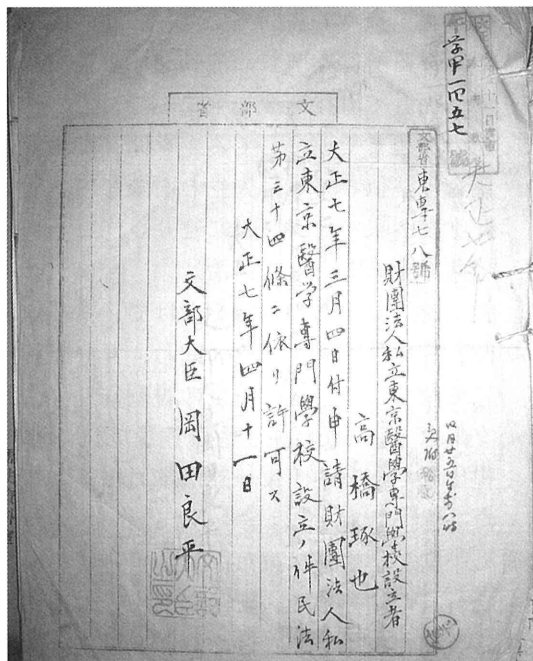


写真4 文部大臣の設立認可証（大正7年4月11日付け）

敬、久原（房之助）、中島（久万吉）。順天堂、佐藤（達次郎）博士に面会。校長・病院長共承諾。

三月六日 七時半頃より、学校。ひる帰り。佐藤達次郎氏よりむし物一箱。

第四回本部会議 大正七年三月五日（火曜日）  
午後七時半開会

△報告事項

竹下氏訪問（青山剛一）

本日午後三時頃、本校特別教室設計図竣成の分丈け竹下氏の許に持行く。其他土地謄本の事を尋ねし所、多分それは高橋先生の許に来てる筈だ。而して認可請願書類（公立私立専門学校規定）は昨日の日附にして、本日郡役所に持ち行き、而る後、府庁の方へ届け出たり。因に本校の開校期日は四月一日として出願せり（筆者註：写真4のように、大正7年3月4日付けで、申請書が文部省に提出された。なお、開校期日は4月1日として申請された）。

報告（後藤哲雄）

本日午前十時より、学校に於て、学生一同を集め、絵画会の事に付、尽力するよう依頼す。

其席上、種々の質問出でたり。要するに彼等の訴うる所は本部員の活動する目的と一致す。而して直接高橋先生に面会して、学校問題の那邊まで進捗してるかを聞き度しての希望なり。依って本日先生と面談して、明朝八時学校へ来て貰うことにせり。

佐藤博士訪問 (杉山泰治)

長 (委三美) 君の依頼を受けて、本日午後五時、佐藤達次郎博士を訪問し、五分間程玄閑にて待たされ、無事先生の履歴書を手に入れ立帰れり。(筆者註：佐藤達次郎は履歴書を提出したが、中濱東一郎は結局提出しなかった。それについては前々号<sup>4)</sup>に詳しく述べた)

この日の午前、学生達は東京医学講習所において学生大会を行った。そこで、新医学校設立の進捗状況に関する質問が続出したことから、翌日高橋琢也の説明を受けることとなった。それについては、

高橋先生に対し色々の質問 討議会舉行

昨日、学生一般の希望により、三月六日 (水曜日) 午前八時半より、高橋先生に対し質問する機会を与う。更る代る、七、八人立ちて質問を試み、漸く学生等の腑に落ちる所もあり。零時半閉会す。と本部会記録 (3月5日)<sup>2)</sup> に書かれてある。これは高橋日記<sup>3)</sup> の「三月六日 七時半頃より、学校。ひる帰り」という記述と一致する。

3月15日に高橋琢也は東京府知事 (井上友一) を訪れ府庁による東京医学専門学校承認を最終的に確認した。その足で原敬や後藤新平らを訪問し、府庁での承認を伝えるとともに、文部省への働きかけを再度懇請した。中島久万吉、久原房之助、福沢桃助らの財界首脳を訪れ、寄附の依頼を行なった。3月17日に訪れたのは高橋琢也の親友・中橋徳五郎 (大阪商船社長のち文部大臣) であった。高橋琢也が最も信頼していたのは原敬 (政友会会長、のち総理大臣)、後藤新平内務大臣、中橋徳三郎 (のち文部大臣)、田所美治文部次官らであった。

高橋琢也日記・大正七年三月十五日 大倉 (喜七郎)、東京府知事、内務部長、原敬、後藤 (新平) 男、三菱、中島 (久万吉)、久原 (房之助)、福沢 (桃介)、三会堂、

三月十七日 雨天。午後より天気晴る。中橋徳五郎、坂東勘五郎、川崎銀行、松平乗承

高橋琢也は3月18日夜遅く本部会学生と会い、文部省へ学生達が調査に行くことに対して釘をさした。

第四十三回本部会議 大正七年三月十八日 (月曜日) 午後七時十分開会

高橋先生の話

同夜十一時、高橋先生訪問の顛末 (青山剛一) 認可申請書類は確に文部省に行ったとの事。府知事は単に捺印して文部省の手に渡したような話。「君等が文部省に行って取審べていけないとは云わぬが、兎角私を信用せぬようにも受取られるから見合したら良からう。君等が行ったために認可が遅れるような事あっても知らんぞ」と語る。

次に本校関係者にして重要な地位に在る人に頼み、認可を疾く呉れる様に御願して貰っては如何かと云う本部の意見に対し、「其の事に関しては後藤内相にも篤と依頼してあるから、それで充分だと思ふ。なまじ他の人を頼んで、殊更に内容を露出し、何か其処に理屈でも付けられるれば事が却って面倒になる恐れがある」と。不賛成の意味を洩らされたり。

3月19日より3月30日にかけて、高橋琢也は文部省や東京府庁を足繁く訪れ、申請書類の認可の催促を行なった。とくに開校期日を4月1日として申請していたことから、高橋琢也は3月28日に文部省を訪れ、松浦鎮次郎と最終段階の交渉を行った (4月1日の本部会記録<sup>2)</sup> を参照)。

高橋琢也日記・大正七年三月十九日 七時半より松浦 (鎮次郎)、村上 (敬次郎)、東京府、北海道拓殖銀行、文部省、高橋光威、三会堂。(筆者註：高橋琢也は朝7時半に松浦鎮次郎を自宅に訪問したと考えられる。この日はまず東京府に行き、文部省を訪れていることから、申請書類の最終的な調整と確認を行なった模様である。)

三月二十日 朝より武井 (守正)、阪井、和田 (彦次郎)、小池、船越 (光之丞)、渡辺修、川崎銀行。

三月二十六日 大風。午後より東京府、国光生命保険会社 (国光生命には高額借款の件で訪れた)

三月二十八日 風。十時頃より坂東勘五郎葬式、青山。文部省、政友会、三緑亭。九時帰宅 (こ

の日の文部省での出来事は4月1日の本部会記録<sup>2)</sup>に詳しく述べられてある)

三月三十日 天気雨ふり。文部省、三井。正午帰宅。来人、池上（作三）、国論社佐藤（貝村）（4月1日の開校を目指してこの日も高橋琢也は文部省を訪問した）

高橋琢也日記・四月一日 好天気。朝より陸軍大臣、内務大臣、関、憲兵分所。

この日、高橋琢也は学生達の徴兵忌避問題の沈静化のために陸軍大臣、内務大臣や憲兵分所（新宿、赤坂）を訪問した（第7章に詳述）。また、高橋琢也が文部省へ提出した書類（写真4に記載されているように大正7年3月4日付けであった）には東京医学専門学校開校期日は4月1日と申請されていたが（3月5日の本部会記録<sup>2)</sup>）、文部省からは認可の連絡はとうとう来なかった。

本部会委員長・後藤哲雄は高橋琢也を3月29日に訪問して、文部省での交渉状況を質していた（以下の本部会議議事録）。その時の高橋琢也の話では松浦局長は注文をつけるばかりで承認に関しては難しいということであった。高橋琢也は「我に戦う意思あれば」と最終的に文部省と対決する姿勢を後藤に示した。また、高橋琢也は経営難に陥っていた日本医学専門学校を買収することも念頭に置くようになっていた。

第四十五回本部会議 大正七年四月一日（月曜日）午後七時十五分 開始

△報告事項 認可申請の其後（後藤哲雄）

三月二十九日、正午頃、老骨（高橋琢也）に会う。而して文部省と認可の交渉如何と成行きしかを訊す。「実は昨日、昼飯も喫せず、本問題に就きて交渉す。局長の話は例に由って六ヶ敷し。（杉浦鎮次郎局長）曰く、『本官は責任上一応は北海道室蘭の土地の価値に就き取り審ぶる必要あり』と。依って先生は「目下危急を告ぐる場合に於て、実地調査等に就き徒らに月日を経過するは本校にとりて由々敷問題なれば、其の手数を省略して貰いたし」と懇々頼む。

局長曰く、『要するに四月十五日迄認可が下りれば宜しからん。実は願書の内容調査に属官一人を担当してやらせつつあり。兎に角追っかけ参事会を開きて協議を経たる後と知る可も』と。先生は「先日来、文部省の認可交渉と寄附

金募集に極力運動せられつつあり。依って近々中第一回寄附金募集の報告を各新聞に出す可く、目下其の準備中なり」と。而して「其の募集金額凡そ弍萬円以上を算す可し」と云う。「新聞の記事に就ては茲暫らく隠忍自重を要す。我（高橋琢也）に戦う意志あれば多くの材料に由り勝算あれども現下の大切なる場合、控え居るなり。今後文部省は日本医学専が如何なる結果を見るとも、決して配慮干渉せざるべし」と聞く。

学校敷地の件（小川東洋）

此度高橋先生には国光生命保険会社より金七萬円借受け、それに所持の金を足して土地会社より学校敷地全部を請求し、本日登記する筈なりと聞く。

日医校舎競売の件（杉山泰治）

高橋先生の話に由れば、今度の競売にて落札しても良いと云う事を聞き込み、去る三月二十九日午後二時に長（委三美）君と共に東京区裁判所に行き取調ぶ。

A. 大正七年（ぬ）第五十九号

抵当権者 東原商工株式会社の申立  
競売期日 場所 東京区裁判所  
日時 大正七年四月八日午前十時  
執行をなすべき執達吏 山田鎮八郎  
競落期日 場所 東京区裁判所  
日時 大正七年四月九日午前十時  
不動産の表示

一. 木造瓦葺二階建て一棟 建坪四十坪 二階四十坪  
此の競売最低価額金壹千七百円

右物件に対して存続期間大正六年九月二十六日より向う満三ヶ年、貸料一ヶ月十五円の貸借権設定あり。

1. 大正七年（ぬ）第三十六号

抵当権者 寺井力三郎氏の申立  
競売期日 場所 東京区裁判所 日時  
四月十五日午前十時  
執行をなすべき執達吏 山田鎮八郎  
競落期日 場所 東京区裁判所 日時  
大正七年四月十六日午前十時  
不動産の表示 東京本郷区千駄木町五十九、二号

一. 木造瓦葺二階一棟 建坪百八拾七

坪 二階百七十七坪七号五勺

実測 建坪二百五十坪七合五勺

二階百八十九坪五合

会所 一、煉瓦造スレート葺平家一棟  
(外科手術室) 建坪十五坪

会所 一、木造瓦葺平家一棟(病理解剖室) 建坪三十二坪

会所 一、木造瓦葺平家一棟(臨床講義室) 建坪四十坪

右一括競売に附す

#### ▲決議事項

若し高橋先生に於かれて、日医校舎競売を落札する意志なき時は、学生各自若干円宛贈金して、控室にあった校舎(壱千七円)を買収することと決す。

大正七年三月三十日発行の医海時報に下に掲ぐる記事を書せたり。依例如例(筆者註：医海時報は山根正次に好意的な立場を取っていたことから、以下のような東京医学専門学校設立に対して否定的な記事となった)。

#### □東京医学校認可申請

政友会に泣を入れたる結果にや、東京医学講習所長高橋琢也翁は、今回文部省に対し「私立東京医学専門学校」として、専門学校令に準拠して設立認可の件を申請せり。

文部省が果して政友会に恐れて、容易に設立の認可を与うるかの如き態度に出でむか。先きには文部省は政友会を憎むの結果、故なく医師法改正案を目して政友系臭しとて非業の運命に終らしたるを別項にあるの事情存するにも不拘、一方には政友会を恐れて認可を与えんとするの風あり。

当局果して東京医学校に対し、専門学校令に拠ることを認可すべきや否や、吾人は切に注意す。日本医学専門の苦き経験を忘るる勿らんことを。

高橋琢也日記・四月二日 天気晴れ。来人、後藤外一名。竹下(文隆)の手にて大久保地所かきかえ相済。七百二十円也増加印紙代。大久保登記済地所。金七萬五千円也、国光生命より借入。五十五円也公正並に登記雜費。

国光生命より借入れた75,000円は東大久保敷地購入代金として地主・鈴木久作に支払われ地所の書き換えが終わった。

高橋琢也日記・四月三日 神武天皇祭。朝より田所(美治)、早川(千吉郎)、山本(条太郎)、△田。午前十時帰宅。評議員を村上(敬次郎)、和田(彦次郎)依頼する。

この日高橋琢也は田所美治文部次官を訪問した。恐らく文部省、とくに岡田良平文部大臣と松浦鎮次郎専門局長の考えを最終確認するためだったのであろう。これにより高橋琢也は最終的な行動への決意を固めた。また、田所次官からは東京医学専門学校の評議員としての最終受諾が得られた。この日、村上敬次郎と和田彦次郎らが東京医学専門学校の評議員となることを了承したことから、新医学校の組織について固まった。

評議員は最終的に、水野鍊太郎、小川平吉、浅田徳則、石黒忠恵、高橋光威、秦豊助、村上敬次郎、和田彦次郎、神田鐳蔵、古市公威、勝田銀次郎、田所美治、橋本圭三郎、大谷嘉平、片岡正輝、山科礼蔵、若尾幾造、野口遵らが引き受けた。なお田所美治文部次官は大正7年4月以降昭和二十年まで評議員を継続して務めた。

高橋琢也日記・四月四日 好天気。朝より浅野(長勳)、明治絵画会、内務大臣官舎。午後より関会葬。大久保学校に督学官来る。朝五時二十五分、中島つる巻来る。尾崎東京駅むかい行く。学生交。佐藤達次郎。

4月4日朝より高橋琢也は主君であった浅野長勳を訪れている。高橋琢也の4月6日の決行(後述)に向けた気持ちは、討ち入り前に播州浅野家を訪れた大石蔵之助と同じ心境にあったのかもしれない(筆者註：高橋琢也と広島藩主浅野長勳との親密な主従関係は明治維新前の長州征伐より始まり、生涯にわたって続いた)。浅野家では郷党の加藤友三郎海軍大臣と出会っている(4月7日の本部会記録<sup>2)</sup>参照)。また4月4日、後藤新平・内務大臣を官邸にまで訪問している。この日の早朝、高橋琢也の娘・中島鶴巻が京都より高橋のもとへ戻っている。学生達や順天堂医院・佐藤達次郎とも会見している。4月6日のクライマックスに向けた高橋琢也の断固とした決意が伺える。また、この日の午後、文部省より督学官(長屋順耳)が東大久保の新校舎の建築状況を含めた調査に訪れた。長屋順耳のその時の印象



は東京医学専門学校が認可された後に発行された雑誌「国論」（東京医学専門学校設立祝賀号）<sup>5)</sup>に詳しく述べられてある。

#### 健全なる発達を望む

##### 文部省督学官 長屋順耳

今度認可になった東京医学専門学校は只一寸行って見たが、是は自分の方の受持ちでもなく、また医者の方は門外漢であるから自分等には分らないが、要するに今の処ではまだ専門学校と云う設備は出来て居らないが、漸次完成するものと信じて居る。今の所ではまだ建築も一棟より外出来て居らないし、病院も今出来かかって居ようだが、学生の練習用としてはあれではまだ少し狭いようにも思われる。夫れ今の所は医学専門学校と云っても解剖室が一つあるではなし、死室が一つあるでもなく、只一棟の建物が漸く出来ただけであって、現在は医学専門学校としては頗る不完全なものであると云うことは、創立者も認めて居らることと思う。併し是は現在に於ては未完成品であるから無理もないことと思うけれども、高橋創立委員長は非常なる精力家であるから漸次建物他の設備も出来、近き将来に於ては立派な医学専門学校となるものと自分等は思っている。

高橋創立委員長は却々熱心に遣って居られるから案外早く出来るかもしれないと思うが、費用も却々掛かるであろう。是から建物も建てなければならぬ。種々の設備も為なければならぬが、是は費用の伴う仕事であるから割合に骨の折れることは言うまでもない。併し乍ら教授の方は佐藤博士のような立派な人が居られるのであるから、段々良くなるであろうが、要するに学問の方と経営の方と両々相俟って完成なる発達をせしめ、一日も早く完備した医学専門学校とせられ、人を殺すような医者は一人も出さず、立派な医学を作り、以って国家の為に大に尽されんことを切に希望する。今の所は余り内容に立入って批評することは出来ぬと思うが、茲には唯完全なる発達を切に望むのである。

長屋督学官は「建物は未だ不十分であるが、近い将来の完成を期待する」と好意的に文部省へ報告したと考えられる。

#### 本部会記録・四月四日

午後二時二十分文部省督学官庁長屋順耳氏、本校校舎、附属病院を視察に来らる。本校敷地四千二百六坪は此度土地会社より購入し、大正七年四月二日登記を済まして、全部高橋先生の所有に帰したりと云う。

#### 高橋琢也日記・四月六日 天気好し。朝より文部省、政友会本部。浅野様東京駅見送り。中島つる巻

4月4日に文部省督学官が東大久保まで訪問して調査し、それを文部省に報告していたにもかかわらず、岡田文部大臣は松浦鎮次郎の強硬な反対により、反対の態度を取り続けていた。前述のように、学生達の徴兵免除期限は4月14日であり、文部省へ申請した書類の認可プロセスには少なくとも一週間はかかることから、高橋琢也は4月6日を文部省の認可の最終期限と決めていたのではないだろうか。高橋琢也日記の冒頭には日頃は「好天気」や「晴天」と書かれてあるが、この日の日記だけは「天気好し」と書かれてあり、そこには従来にはない意気込みと決意がこめられてある。「天気晴朗なれども波高し」に通ずるものがある。4月6日朝、高橋琢也は決然と文部省に向かい、岡田良平文部大臣と会見した。その経緯は唐木秀夫【東京医学専門学校、昭和9年卒。学生時代は学生会委員長として活躍し、高橋琢也からは昔話を親しく聞かされていたようである。（高橋龍二氏談）】の高橋琢也追悼文に詳細に記述されている。

「そのご生前、割合に交渉の多かった最近の学生の一人として、又、一番新しい卒業生の一人として「赤裸の総理の姿」を思い出すままに綴ってみたい。」と唐木は述べながら、大正7年4月6日の高橋琢也の文部省での出来事を淡々と記述している（東京医学専門学校雑誌、高橋琢也追悼号）<sup>5)</sup>。

学校創立当時、主管省の設立認定には相当の難色があり、一方世間からは学生の徴兵検査忌避云々の誤解を受けたり、種々の流言蜚語も飛び、事態は決して楽観を許さなかった。

当時の文部大臣は岡田良平氏、次官が田所美治氏、専門学務局長は今の九大総長松浦鎮次郎氏で、松浦局長あたりが仲々強硬な反対意見を有つていたらしく、それに今から考えれば、創業の際のこと故、内容設備の点にも相当の無理

があったことは否めまい。

大正七年四月初旬、悲壮な決心を固めた（高橋琢也）先生は、表面極めて冷静な面持のうちにも、懐中深く短刀を呑んで、文部省に岡田文相を訪ね、条理を尽して抱負を吐露し、認可の発令を求めたが、繁文縟礼に拘泥する文相は依然として反対意見を固執し続けた。

遂に肚を決めた先生は、創立計画に関与した一般後援賛助者と、認可指令を翹望すること黄白い嘴をあげ揃えて母鳥の帰りを待つ小雛にも似た四百余名の学生とに対する責任感から、先ず文相を刺して後、自らも屠腹して男児の面目を全うせんものと、短刀の柄も砕けんばかりに確く握り締めてじりじりと詰め寄った。

真逆斯迄とは思ひも寄らなかった大臣は、此の態に忽ち色を失って「まま、暫く、暫く。」とその場を抑えてすぐに次官、局長と別室に会い、「辻（とて）もあの老人には適わぬから——。」とて同意を求め、許可の手續をとらしめた。

蓋し創立に絡む秘話の一つであろう。

高橋琢也の誠意を貫いた新医学校設立運動も、文部省・松浦鎮次郎局長によって拒否され、岡田良平文部大臣も東京医学専門学校の承認を行なおうとしなかった。4月14日に学生達の徴兵忌避の期限が迫ったことから、開学への準備をすべて備えたうえで高橋琢也は断固とした意思をもって岡田良平文部大臣に対面した。このような高橋琢也の壮絶な行動によって、ついに東京医学専門学校の認可を文部省より勝ち取ったのであった。鬼神をも動かした高橋琢也の崇高な行動は東京医科大学の創学に関わる根源的な事件であるといえる。この時高橋琢也が持っていた懐刀は現在でもご遺族により大切に保管されている（東京医科大学五十年史<sup>6)</sup>）。

中島鶴巻は高橋琢也の娘で、京都大学教授中島玉吉に嫁いでいたが、前々日の4月4日に帰京している。高橋琢也は文部省訪問で東京医学専門学校設立が承認されなければその場で屠腹する覚悟であった。4月17日は妻・富士子の三回忌であったが、それよりも東京医学専門学校設立のための談判が先にあったことから、もしものことを考え高橋琢也は家族を皆東京に呼び集めていたと思われる。故原三郎名誉教授は「もし四月十五日以前に認可設立が得られなければ、学生の運命は極めて重大な状態にあり、この時高橋琢也翁は、もし四月十五日以前に設

立認可が得られなければ学生に申し訳けないと考え、自決の用意までしていた。その時の短刀は近親の人により保管されている」（東京医科大学五十年史<sup>6)</sup>）と婉曲に記述されているが、唐木秀夫の追悼文の内容が事実なのであろう。この日高橋琢也は文部省で本懐を遂げたのち、政友会に原敬を訪れ、さらに東京駅に主君・浅野長勲を見送り、文部省が内諾したことを伝えた。浅野長勲は東京医学専門学校のための寄付を真っ先に行っていた（高橋日記）。高橋琢也日記（4月6日）からは以上のことが類推される。

高橋琢也日記・大正七年四月七日 雨天。朝より自動車にて出かけ、後藤（新平）内相、川崎銀行、早川千吉郎、団琢磨、中島久万吉。来人、朝後藤（哲雄）始め外一名、竹下（文隆）。夜に至り、川目（鎌太郎）外三名。夕皆つれて墓参。自動車にて行く。

この日は朝より高橋琢也は全幅の信頼を措いていた後藤新平内務大臣を訪れ、前日文部大臣が東京医学専門学校設立を内諾したことを報告した。また、早川千吉郎、団琢磨、中島久万吉ら、三井財閥首脳を訪れ、文部省の内諾について報告し、多額の寄附を寄せるよう再度要請したものと考えられる。高橋琢也は「人事を尽くして天命を待つ」ということを信条としていた<sup>7)</sup>。夕方、高橋琢也は家族とともに墓参りをしている。出来ることはすべて行なったという心境であったのでないだろうか。

実はこの日の朝早く松浦鎮次郎より高橋琢也へ電話がなされている。その内容は高橋琢也日記<sup>3)</sup>には「4月7日」として別途記述されてある。

（松浦鎮次郎）専門（学校局長）曰く、「認可しても日本医専に合するが良し。新たに募集の必要なし。新学生には義理立は要らず。一体私立では出来るものでない（どこ迄も官学主義）。自分は四百名救済を行掛けなれば絶対に新規の医専設立は許可せず」と。法令に依らず一属僚の分在として新規の私立医専は許可せずとは言語道断の申し条なり。此言は会話の度毎とに云うことなり。又曰く、「指定は許しませんよ」と。

この松浦鎮次郎の電話は「東京医学専門学校の設立は認めるけれども、日本医学専門学校と合併すべきである。今回の承認は400名の学生の救済の必要があったからやったままで、それがなければ絶対新規

の医学校設立は認めなかった」という主旨であった。前日の岡田良平文部大臣の決定に憤懣やるかたない松浦鎮次郎の早朝の電話であった。東京医科大学の校歌の中の「威を官学に名を借らず」<sup>8)</sup>の一節は高橋琢也の「どこ迄も官学主義」という記述（上記下線部分）と良く符号する。

本部会記録の4月7日の記録<sup>2)</sup>の中ではその日の松浦鎮次郎の電話の内容は、伝聞として学生達に伝えられている。また、4月6日の文部省での出来事について学生達には「強硬な松浦局長が最終的に認可を承諾した」と内容を変えて伝えられている。それによって学生達は一同安堵した。

#### 第四十六回本部会議 大正七年四月七日(日曜日)

午後七時開会す

△報告事項

△第一、認可申請後の景況（後藤哲雄）

去る四月四日、午後二時半頃、文部省督学官なる長屋順耳氏、本校へ視察に来られし。当時の模様就ては大凡諸君の知らるる所なり。故に略す。

翌五日の朝、佐藤達次郎博士は文部省の内命に由り、出頭されし旨を聞く。其の要件の内容は余輩未だ知らず。多分此度本校校長、病院長となられん事に就き、今後の経営画策等に付て訊かれん事と想像す。

今朝高橋先生を訪問して、聞き得たる点に就て申せば、文部省に於て此度先生所有の北海道室蘭の土地、並に青森の土地価額に付て調査せし処、青森県知事の報告によれば実際に於ての価額は、先生が財団に一部に記載されし価額よりは遙かに少なし。即ち約壱萬円某の相違ありと聞く。而して財団に於ても、貳拾萬円位にては不足なれば、其の不足の分を追加せよと局長の注文なり。仍而止むなく、今回購求して登記を受けし本校敷地を全部、先生が家族扶養料として取置きし金並に是迄蒐集せし創立寄附金を書き入れて、合計約参拾五萬円の財産にせり上げたり。

「昨夜竹下氏と共に財団書類を訂正して、今朝松浦局長の自宅を訪れし所、生憎公用か私用の為めに不在にて（筆者註：実際は前述のようにこの日、松浦鎮次郎局長より高橋琢也へ電話があった）、止むなく有力なる諸名士を歴訪せり。局長は兎角偏頗な考えを持って居らるら

し。今日になりて日本医専と合併せしめんとする口吻を洩らされ、文部当局の責任を遁がれんとするが如き傾向あり（筆者註：この日の電話で松浦局長はこのことを述べた。しかし、2月26日には松浦は日本医学専門学校の東京医学専門学校への合併は認めないと言っている（高橋琢也日記<sup>3)</sup>）。目下は最も重要な時機なり。今後一週間は死力を尽して奮闘する積り。万一認可遅るるが如き事あらば、我に於て最後の決心あり。局長我に、学校敷地購入に要せし七萬円の負債を負えと言ふ。余諾す。」（高橋先生談）  
徴兵問題（後藤）

愈々徴兵猶予期日接迫したれば、徴兵関係者の周章、顧慮甚だし。現に三十名程は国元の方々照会されんと聞く。学生並に父兄の方、日々我が自宅、本部を訪問して、意見を叩く者数多あり。仮令ば、菱川氏の父の如きは其一例なり。

△決議事項

今夜只今より、高橋先生を訪問して、文部省当局との交渉に就き尋ぬること。

△四月七日の夜九時、右記委員四名高橋先生を訪問し、午前十時帰館しての報告次の如し（佐多正蔵）

（高橋先生の話）

- A. 本校財団の追加に付、書類訂正せんものと、本校の特別教室竣成期日等の報告を齊らしして、今朝局長を訪ねしも在らず。
- B. 其足を以て後藤（新平）、三井（財閥）、古河（財閥）、浅野（子爵、前広島藩藩主）等を歴訪し、只管本校に認可の疾く来るよいう、或は寄附金が早く集まる様頼み置きたり。中就、後藤男の言最も信頼するに足るべく。浅野家に於て加藤（友三郎）海相とも邂逅したれば、専ら頼めり（これらの話は、高橋琢也日記・4月6日<sup>3)</sup>の記述と一致する）。
- C. 本日男爵村上敬次郎氏、並びに和田彦次郎氏に対し、本校認可後の評議員たる事を願いたり。因に、評議員は確乎たる者、凡そ三十名位作る積りなりと語る。
- D. 徴兵問題に付意見を尋ぬ。曰く、「嘗て陸軍省主事に面談して、懇ろに頼みし所、宜しいとの答弁を得たれば、聊か安心し居たり。然るに此度聴取書類が検事局に回付さ

れしと云うは疑わし。何か確たる証拠でもあるのか」と反問さる。

- E. 文部省督学官長屋氏の復命は「只学校舎が小さし」とのみ云われたらし。依而吾校にとり大に有利なる答弁と謂う可し。
- F. 佐藤博士の文部省召還に関しては、多分学校の経営状態及び病院の維持等に就き賛同を受けたるものと覚ゆ。当時佐藤博士より電話来りて「学校校舎の不足の分何時頃迄出来るか」を問われり。
- G. 認可来りしと同時に、徴兵猶予も出来るかと尋ねし所、恐らく夫れは出来る事と思う。何となれば、認可申請、校長の許可願、徴兵猶予の出来る願書を一括して同時に提出したれば、一緒に許可あるものと信ず。
- H. 日医校舎競売の件に関しては「一工夫して」と語る。「此度、磯部を彼の学校より隠退させ、其後を経営する後継者が出来たと文部省にて聞きしも、夫れは嘘らしい。二三日前迄はそんな話は些とも無かつた」と言わる。  
(何でも磯部に三万円の隠退料をやるような話)(筆者註：実際は日本医学専門学校は下線のようになっていた。)
- I. 病院開院の事に付、頃田警視庁に行きて頼み込みし所、重要な地位に在る者三名諾されたりと。
- J. 昨日局長と会合せん折、(松浦)局長の言は何時も冷静、辛烈なりしかば、一時は非常に激昂して争論せしも、結局、局長は我意中を試みるなりと心付き、面を柔ぐ。懇ろに認可の早く来るよう願ひし所「承知した」との言を聞き、心強く退庁せり。(筆者註：昨日とは4月6日のことであり、高橋琢也が文部省を訪れ、文部大臣らに折衝したときのことをいっている。高橋琢也はこのように学生達には文部省が承諾したことを婉曲なかたちで伝えた。)

#### △結論

要するに文部省は先きに長屋督学官を本校に派遣し、次に佐藤博士を招致したる点を考うれば、吾校に好意を有し、吾に対し同情を表せしものと推測して可なるべし。  
(同夜十時二十分 閉会)

#### 第四回本部報告会 大正七年四月八日(月曜日)

本校内階上に於て、午前十時より第四回本部の報告会を挙行す。(筆者註：この日の本部会記録<sup>2)</sup>は非常に簡潔であり、ここで本部会会議は終了となった。前日の会議が事実上、最後の大きな会議となった。)

高橋琢也日記・四月八日 天気曇り。朝より西園寺(公望)、秋元(興朝)。文部省、追加書類を出す。午後二時半、電話にて文部省出る。内務省林野管理局、商業会議所、宝田(石油)社、三菱社、中島(久万吉)男爵。

この日、高橋琢也は文部省に追加書類を提出したが、これは4月6日に東京医学専門学校設立の内諾が得られたことを踏まえたものであろう。また、上記下線の「電話にて文部省出る」とは、文部省より最終確認の連絡があったのであろう。

四月九日 自動車にて後藤内相夫人死去見舞に。砂糖四円二十銭也供物。文部省。

この日も文部省を訪問したが、書類上の最終的な調整が行なわれたと推測される。

四月十日 天気雨ふり。せき出。少し発熱。一日静養なす。

全てなすべきことはなした高橋琢也は長年の疲れが一気に出て、発熱となった模様である。

四月十一日 雨天。今日も一日静養なす。文部省より認可の内報電話来る。来人、学生。祝詞に大勢来る。松原。

とうとう4月11日夕方、文部省から認可の内報が高橋琢也へ電話で伝えられた。翌4月12日に岡田良平文部大臣の設立認可書(写真4)が正式に送付されたことにより、高橋琢也と学生達の悲願は成就したのである。高橋琢也日記<sup>3)</sup>にはこの日も淡々と事実のみが記載されている。

#### 9. エピローグ

4月11日の夕刻に文部省より高橋琢也へ東京医学専門学校認可の内報があった。そのことを高橋琢也より伝え聞いた学生達の興奮ぶりは、筆舌を尽くしがたいものがある。かれらの欣喜雀躍とした様子は本部会記録<sup>2)</sup>や雑誌「国論」<sup>9)</sup>(写真5)にありありと残されてある。それらを以下、紹介する。





写真5 雑誌「国論」（東京医学専門学校設立祝賀号）の表紙

本部会記録 4月11日（四月十一日、夕刻認可来）

△ 悦しさの余り

長日月、吾人の熱望し、期待して止まざりし我が東京医学専門学校の認可も、愈々時機到来して、大正七年四月十一日の黄昏近く、来たと言う声を聞く——。

噫、其の瞬間万感交々到りて、弁ずる能わず。暫しが程は唾然たりしなり。

創立委員長たる高橋先生の尽された是迄の御苦心は言わずもがな。造って貰う迄に到りし余輩の心労も又実に一朝一夕の事にあらざりし。今日迄幾多の困難に遭遇して、無量の苦い経験を嘗めた丈、それ丈多く此際歓喜と愉快を感じるなり。

日頃本部員が自他の用務を放擲し、一意専心、学校の事に尽悴した甲斐あって、今日二度と得難き収穫を上げたり。余輩の満足之れに過ぐるものあらんや。

（四月十一日夜の記事） △楽園の響き

認可が来たと言う、四月十一日の晩は学生会本部で大騒ぎ。コモ被りて一樽据えて、賀辞を述べ、来る学生には皆飲ませた。天井がおちて、床板が破れそうな大元気。四顧の止宿人がみたらうが、そんな事を考える余裕がない。後藤本部長初め座に連なる者、禪一つで裸体踊。此春は吾等が為めに天が与えたようなものだ。有難い有難い。何時からか我々は今日の此の悦びを待って居ったのだ。寧ろ焦れ死にする位待って居ったのだ。

周囲が何と言おうが、馬鹿と見ようが、狂気と思うがそんな事に頓着する吾々じゃない。飲めや、唄えや。茶釜で沸かせた。酔うて倒おれりや、ささあ膝枕、なんて偉い酔うたもんだ。酔うた者には罪はない。

（四月十二日、認可祝賀会のことに付議す）  
△世は今花盛り

昨宵の雨は見事止んだ。道は未だドロドロだ。認可が来たと聞いて、母校に馳せ参ずるもの数知れず。期せずして一大集団となった。何の顔見ても欣喜の色を湛え、希望の輝きが充ちて居った。中でも中央新聞の朝刊が、本校が認可になった記事を第一番に掲げて、先駆け功名を表わした。

二階の講堂に一同集まって、色々認可祝賀会の事に就き協議したが、皆に心が悦びに溢れ、浮々とした様子で、落付いて議する者少なかった。世は今花の盛りだもの。大に呑め呑め。

（大正七年四月十二日、中央新聞記載、さきがけ）

◎東京医専認可 予て設立認可申請中であった高橋琢也氏等の私立東京医学専門学校は十二日附けを以て文部省より認可の示達があった。

官報 大千七百五号（大正七年四月十二日）

◎文部省告示 第百三十二号

東京府豊多摩郡大久保町に私立東京医学専門学校を専門学校令に依り設置し、大正七年四月より開校の件認可せり。

大正七年四月十二日

文部大臣 岡田良平

◎文部省告示 第百三十三号

東京府 私立東京医学専門学校

右は徴兵令第十三条並文官任用令第六条に依り中学校と同等以上と認定す。

大正七年四月十二日

文部大臣 岡田良平

△元凶征伐（官報発表に対する感想）

果して本校の認可が、徴兵猶予期日たる四月十五日迄許可されるか否かと云う問題で、大多数の学生が少なからず気を揉み、心配して青くなって居ったが、折も折、随分と際どい所を下りたものだ。此の官報に接して、恰も早魃に大



慈雨と云った様な心持がする。高橋先生に御尽力が、遂に文部当局の頑強な奴迄動かしたのだ。「至誠天に通ず」とは此の事だ。

世間の者共、中就日本医専側の奴等は如何に吃驚して粟喰ったろう。実際想像するに、(童謡)子供等迄、節面白く唄うた『磯部のビッコやっつけろ』は遂や実現されたのだ。痛快で堪らない。吾々が有りもせぬ懐口を、無理に才覚して、四拾四円宛出したが、之れが餞けとして、香典になろうとは予期せなんだ。此の官報が出た以上は、再び彼は起つ事が永遠に出来ぬであろう。

#### △愛の曲 (祝賀会準備職務分担) 四月十三日 午前九時

生憎の雨降、里子も応ぜず。集い来る学生等の足は校庭の泥濘に深く印して、間もなく二階が一杯になった。而して明日催さるる祝賀会の事に就き色々協議して各々其の職務についた。解散に先立って、路人の傑作「愛の曲」を合唱して、咲く者の充実した気分を味った。

##### ○その一節

破邪の剣に曇りなく 抜けば滴る秋水の  
露の恵みにいや生え立ちし 東京医専に幸あれよ

我々の騒動は決して無意味ではなかった。過去二ヶ年間色々な辛酸を嘗めてきたが、それが良薬になったものの、決して毒にはならなかったと思う。我々の心尽しで、良い実を結んだのだ。

大正7年4月14日に東京医学専門学校認可の祝賀会は東大久保の敷地内で行われた。そのときのプログラムは次のようなものであった。

- 式次 1. 君が代合唱 2. 後藤本部長の開会之辞 3. 祝賀歌「黎明の曲」合唱 4. 後藤本部長の経過報告 5. 高橋総理の演説 6. 佐藤校長の演説 7. 伊藤知也代議士の演説、続いて金原氏、大野氏、諏訪氏の祝詞演説あり 8. 記念撮影 (写真6)

ここで、高橋琢也の「社会の同情と天佑」と題した挨拶を紹介する。

私は此両三日病床に居りまして、実は今日は少々推して出た位であります。殊に咽喉を傷めて居りますので、発声は良く無いと云うて医者



写真6 祝賀会記念撮影 (大正7年4月14日)。第二列の中心の高橋琢也の左は佐藤達次郎校長、最前列の中心は後藤哲雄 (本部会委員長)

から止められて居りますから、長く話をいたすことも出来ず、また斯う云う広いところでございますから低い声で聴取悪いところもあると思いますが、其辺はご容赦をして戴きたい。只今学生総代の後藤君からも、話がありましたが、今日学生会に於て此祝賀会を開かれまして、吾々を初め多数の人が此処にお招きを受けた。此点に就ては先ず以て深く謝意を述べて置きます。

先刻後藤君から高橋に謝恩云々と云うことを言われましたが、是は今日私が直にお受けすることは出来得ない。若し私の理想通に総てが完成いたしました時には、或は其幾分をお受けする可能性があるかも知れませぬが、今日は直に之をお受け致すわけには参らぬので御座います。

今日は総て内輪の方々ばかりで、学生以外には日常教鞭を執って御でになる教授諸君、また学生の保証人、父兄の方々と云う頗る団欒した嬉しい而して寔に楽しい会合でありますから、内輪話と思うて何事もお話いたします。

今回東京医学専門学校は認可になりました、と云う点に就ては学生の喜びは勿論であります。斯く申上ぐる琢也も其実非常に愉快に堪えぬ次第で御座います。学生諸君は殆ど二ヶ年の間、種々の艱難をせられて、彼の奮闘の半年を今より顧みられても、恐らくは異様の感にうたれることであろうと思う。況や奮闘半年の過ぎた後、詰り一年有半と云うものは一方には授業は受けて居るけれども、一方には精神的に最も奮闘して居ったことは私等は承知して居る。唯

自分の目的とするところの授業を修める、即ち医学校の生徒として学ぶことの途を早く開けて欲しいと云うことに向って進んで居るばかりであるけれども、其苦辛たるや、種々の困難に遭ったことも承知して居る。然るに其宿望は今回東京医学専門学校の認可と共に達せられたことである。

諸君は克く此老船と申しませう、誠に古い朽ちたる船に乗って、一年有半と云う間を能く辛棒せられたと思う。此古い朽ちたる船を遣るに就ては一年半の間、琢也としてはどの位困難であったかと云うことは、或は他の方々の想像せらるる以上であったかも知れない。台風は後から後から吹いて来、怒濤は時を嫌わず逆巻いて頗る困難であった。殆ど破船するか、覆えるか、兎に角尋常では彼岸に達し得られないように見えたのであろうと思う。併し乍ら、琢也一人は決してそうは思うて居らなかった。如何なる暴風雨に遭うても如何なる怒濤に遭遇しても此老船は断じて目的の彼岸には到着し得るものと思つて居た。夫故、諸君もご承知の如く是迄度々諸君に話した場合に、琢也は出来るだろうとか、出来るかも知れぬ、遣つて見ようと云うような曖昧なことは少しも申上げていない。

断じて造ると信じて、遣る拵えると、云うことを何時でも言つて居た。唯時期の問題であると申して置いた。幸いにして自分の初一念を達し得ることが出来、遂に今回の認可の指令に接することを得たのは、誠に同慶の至りに堪えぬ次第であります。

去り乍ら此認可を得たのに就て、琢也に取つては今日迄より、寧ろ今日以後の方がより以上に困難であると思う。何故なれば認可を得るまでは諸君に対しては何処までも責があるけれども、諸君以外には責がなかったが、此認可を得た以後と云うものは天下に対して責を負わなければならぬ。今後之を完全なものにしようとするには、今の私は例えば半縫の着物のようなもので、是から袖も付けなければならぬ。衽も衽も付けなければ完全な着物にはならぬのであるが、其完全な着物を造る全責任は誰にあるかと云うと、夫は高橋琢也に懸つて居つて、是は必ず完全な着物に仕立上げなければならぬ。之を思ひますると今日以後はより以上最も苦しい立

場に居るのである。併し琢也にして幸い天が籍すに命を以てして呉れたならば矢張り是を完全にする。元来今回の事は何んで出来たか能く分からぬ。決して琢也の功でも何でも無い。世に所謂天佑と云うものがあるとするならば、是は全く天の佑けである。真に天の佑がなければ絶対に出来なかつたのであります。若し之を助成したのがあるとすれば、是は様々な点にありませうが、若し一々数えませうれば数限りもないことだが、其中にも佐藤博士が諸君の為に非常に厚い同情をして下され、東京医学講習所を開いて、諸先生に御回り下さつて普通の医学専門学校より以上の立派な先生を揃え、立派な授業をして戴くことが出来る。

万が一にも認可は得て立派な学校の名は付いたが、日本医学専門学校に居た時代の学生であれば風儀が悪い。斯く云うようなことを東京医学専門学校の学生になつてからも言われると云うようなことになつた日には、単り諸君の恥辱のみでない。諸先生から引いては聊か力を尽しつつある此琢也にまで、及ぶのであることは申上ぐるまでもない。是を一つ諸君の念頭に置いて貰いたいと思つて。

殊に諸君の今回校長として戴く佐藤博士は、殊に病院長にまでなつて下さつたことは、諸君の為にはどの位幸福であるか分らぬ。単り諸君のみならず、将来、東京医学専門学校の為に計り知られぬ幸福を得たものと私は深く信じて居るのである。申すまでもないが、是から先生の徳を慕い、名校長を得たと他に向つて誇ると共に、諸君自身の為に一層勉強をして、東京医学専門学校の学生は単り風儀が最も正しいのみならず、学業も頗る優秀であつて、他の医学専門学校と並んで医者試験を受ける時には最も優等であつたといわれるようにして貰いたいと思つて。詰らぬ事を長く申したけれども、実は私は種々まだ諸君にお話したこともあるが、何れ近き将来に開校式、開院式があるから、其場合にまた申上げたい。殊に今日は病床から出て来た許であつて、充分徹底したお話をすること出来ないのは甚だ遺憾とする所であります。唯茲に今日祝賀会に御招に預つた祝辞に代えて一言申上げる次第である。

### △歓喜のどよめき — 乱舞 (四月十四日、祝賀会当日) (写真7、8)

明くれば四月十四日、我々本部会主催の認可祝賀会当日である。幸に雨が上った。貧弱な校庭も紅白の爛幕を廻ぐらし、彩旗提灯で式場を飾り、時々打揚ぐる花火は沖天に轟き、風船玉がフワリフワリ、風の間にも飛び去りて虚空の彼方に消えた。威勢よき楽隊の音につれて、歓喜のどよめきが起った。(当時の有様は遺憾なく国論の記念号に掲載されてあるから、此处では略す)

(問題の提灯行列、決行)

式が済んで、酒と杯が皆の手に渡され、模擬店が開放されると同時に、会場が俄かに景色付いた。酔いの廻わるにつれて到る所で喜劇が演ぜられた。余興が始まる。歓呼の声が湧く。踊る。匆ねる。怒鳴る。果ては夕暮近く、楽隊を先頭に立てて見るも面白い。提灯行列が都大路をねり



写真7 祝賀会風景



写真8 祝賀会風景

歩いた。

### △此の春を独占 (四月十五日、新聞記事、学生募集広告)

昨日の本校認可祝賀会の記事が、どの新聞見ても大抵の新聞に書き列べてあった。記事の内容に就いては、大同小異あるけれど、兎に角我々は或る物を成し遂げ、勝利の杯を上げたと云う事が、社会一般に知れ渡ったのだ。是で我々の意地が通り、男の顔も立った。加うるに早速と学生募集の広告が新聞の一隅を占めた。日本医専の致命傷といってもよい。実に愉快、痛快だ。天の与えた此春の歡樂を、我々学生が独占したようなものだ。

(四学年のクラス会)

此の日午後一時より、本校第四学年のクラス会が花の飛鳥山で行われる事と聞いた。飲めや呑め呑め。今が吾々の一番楽しい時だ。

### △本部員の観桜会 (四月十六日、仮装隊)

認可を得たと云う内報を耳にしてから、毎日毎夜酒びたり。然し人間の精力は割りに強いもんだ。空はどんよりとして花曇り。薄ら寒い風が吹く。印半纏、袴引き、豆絞りの手拭に仮装した本部員一同は、各自貧乏徳利、弁当、杯を手にして永住館を出たのが午前十時過ぎであった。

(飛鳥山で花見の宴)

それから四谷の或る写真館で記念の撮影をして、三台の自動車に分乗して、花の世界飛鳥山へと向った。男ばかりの艶消しじゃ面白くない。一行十五名の所に異性が四名加って花を添えた。矢張り酒に女は付き物と見える。況して花見の酒じゃもの。杯が飛ぶ。花が散る。やがて酒に倦き、唄に勞れ、人に酔うて其処を抜け出て来たのは、未だ戸の暮れぬ中であつた。何時まで此の充実した気分が続くやら——。

### △今日此頃は酒びたり (四月十七日)

花の如き数百の女官を打連らね、酒池肉林の豪華を極めなくとも、酒は結構飲めるもの。飲めば流石に酔う。酔えば赤裸々に其人の本態を露出する。自然本能を發揮するのが当然かも知れぬ。昨日の花見の会の残務整理と云うのが、

夢の如く酔うた後に徐ろに追想するのが面白いのか。今日本部員一同は午後から集まった。

色々の追想談が出る。会計が報告される。東京医学専門学校となったからの編入試験に関する事や、団費、会費取立の事や色々議して、次は昨日都合あって行かれなかった人々のために酒が出た。中では健康を害して呑めぬ人もある。酒もこうなっちゃ罪なものだ。

#### △本部員最後の会合（本部員記念撮影） 四月二十一日（日曜日）午後一時半集合

幸なる哉、本日は山本敬君只一人の欠席を見たのみ。常例のなき日であった。解散を宣するに先立って、一同母校の玄関前に並んで、記念の撮影をした（写真9）。

（編入試験受験資格）然る後、一同永住館に引き揚げて、過日の宿題たる編入試験資格に就き、又団費、法律費、祝賀会費徴収の件等に就き頭脳を絞りて議す。受験資格に関しては、流石に難問題丈けに吾々本部員の決定し能わざる所。之を本校教授会に委ねるより外せんすべなしとす。

別離の杯を上ぐべく、酒を命じ、肴を用意せしむ。最後の会合とて皆遺憾なく飲み且つ唄う。是が愈々最後の宴とあらば、余輩亦大に呑まざるべからず。

十二分に感興を尽くして十時頃解散す。

#### △之れも又最後の学生大会 学生会本部の解散

四月二十七日（土曜日）午後一時より、本校



写真9 本部会学生員の集合写真

講堂に於て学生会本部の報告会を挙げる。例に依って後藤（哲雄）本部長其後の経過報告を述べ、小川（東洋）君の会計報告あり。既に本部攻撃の材料を揃え、何事をか画策しつつある一部の学生のために矢を放たる。思い設けぬ事とて本部は聊か狼狽の気味あり。

#### （本部の解散）

漸くして彼等の誤解もとけ、本部解散を一同に承認して貰い、余等は全く自由の身となる事を得たり。噫、過去半年に亘りて我々本部員の活動は実に目覚ましきものなりき。各方面に対して徹底せる努力は遂に好結果を齎らして、比較的速に時局の着を見るに至れり。然るに些少の欠陥に突き入り、詭弁を弄して、衆人の注意を惹かんとする者あり。活。何する者ぞ。余輩他意なし。一も二も本校の爲め。又吾等学生のために考慮し、始終徹底せる態度もて誠心誠意、此の事に当れり。

余輩常に衆人の期待に背かざる事に心懸け、刻苦艱難、良く己が職務をまっとうせんと努めたり。此の処徒らに自己の位置を怪ぶみ、虚名を貪る奴輩の聊かも容赦を許さざる所なり。森厳にして神聖なるは吾人の使命なればなり。最後に吾校の向上発展を希い、一日も疾く完全の域に達せん事を衷心切望す。

#### （大正七年四月十四日、万朝報所載） ○東京医専認可 十四日に祝賀会

先年、日本医学専門学校の紛擾によって、生徒の大部が退学したが、夫等の生徒を收容すべく新に設けた東京医学専門学校（校長佐藤達次郎博士）は十二日文部省告示によって認可となり、生徒は徴兵猶予の特典にも浴する事となったので、十四日には府下大久保の新校庭で祝賀会を開くそうである。

#### （次は同月同日の東京毎夕新聞所載） 誠心で築き上た東京医専高橋氏の努力で遂に開校の認可受領

元沖縄県知事高橋琢也氏が近業たる東京医学専門学校の創立は愈々十一日を以て認可の内通あり。今十四日官報にて発表の筈であるが、氏はこの創立を以て畢生の事業と爲し、之に全力を傾倒し、最近麹町中六番町の邸宅も東大久保

なる校舎に近き四谷永住町に移した。氏は語る『私が今日、財産の大部を割いてまで此の学校の創立に熱中した動機の最初は一昨年日本医専の学生が学校側と確執を生じた際、広島と同郷学生十九名にその後援を依頼されたのが抑で、其後学校創立委員という貧乏籤を引いた関係上乗りかかった船を飽迄も押進めて辛と対岸へ漕ぎつけたまでで政友会の原総裁初め山本（条太郎）、中橋（徳三郎）両総務、高橋光威氏や井上角五郎氏夫妻、山科礼三氏の如きは寄附金千円の外に百点程買ってくれ、武井守正は三人連れで来て、五十点程買って呉れた。尚文部省の認可は破格の詮議をしてくれたので、後藤（新平）内相、橋本圭三郎、三上忠造氏からも多大の援助を得、来月から開院の運びと成っている。

（四月十四日所載、時事新報記事） □医専の祝賀会

予て紛糾を重ねいたる日本医専は高橋琢也氏等の献身的尽卒の結果、此度、文部省の認可を得、東京医学専門学校と改称し、東大久保に新校舎を建築し、一段落を告げれば、十四日午前十時より同校庭に於て是が盛大なる祝賀会を挙行し、尚お同夜は在校四百有余の学生提灯行列を催すべしと。

（四月十五日、所載、国民新聞記事） ◎医学生  
の提灯行列 東京医学専門学校の祝賀

十二日認可となった府下東大久保なる東京医学専門学校にては十四日同校内に祝賀会を開き午後五時より職員生徒五百名の提灯行列を催し、四谷見附、赤坂溜池を経て、宮城前に到り、夫より文部省前を経て、駿河台よりお茶の水順天堂医院前にて二隊に分れ、一隊は白山、一隊は音羽護国寺にて解散したり。

（次なる生徒募集の広告は、四月十五日、東都のあらゆる各新聞に掲載された。）

生徒募集 一学年一百名限入学を許す  
メ切四月三十日

文部省 詳細は本校事務所へ照会の事  
認可 私立東京医学専門学校

東京府東大久保（ぬけ弁天停留場南入る）

私立東京医学専門学校 文部省認可相成り候に

付、協賛員諸君に謹告候也

高橋琢也

（四月十五日、所載、都新聞記事） ◎東京医  
専の祝賀会

十二日認可となった東大久保なる東京医学専門学校では昨日同校内に祝賀会を開き、午後五時より職員生徒五百名の提灯行列を催し、市谷富久町より四谷見附に出で、溜池芝公園を経て、宮城前に至り、夫れより文部省を駿河台よりお茶の水順天堂医院前にて二隊に分れ、一隊は白山、一隊は音羽護国寺前にて解散したが、折からの細雨の中を彩って美しかった

高橋琢也が主宰する雑誌「国論」<sup>9)</sup>の東京医学専門学校設立祝賀号には学生達の文集が掲載されてある。寺師順一、杉山泰治、小川東洋らの寄稿が当時の学生達の喜びを率直に表している。

蘇れる吾々 寺師順一

此の度、東京医学専門学校が生まれ出でたのは決して偶然でなく又何等の不思議でもない。高橋先生がある地位と名望とを以て、あの古稀を超えられた高年にあられて、此の難問題を芽出度解決せられた事こそ、誠に不思議とせねばならぬ。人ならば融々閑々、唯楽隠居して余生を徐に楽しまれる身なのだ。然も男の一言一諾遂に今日の榮譽を勝得た。吾々は如何にして感謝すべきかを知らない。

大正五年五月、日本医専の騒動は実に天下の悲慘事であった。四百の学生は其の行く所に迷い、父兄は青春の血未だ若き子弟の前途を悲観し、社会の識者は眉を潜めて其救済を叫んだ。曾て石黒男爵が「誰か此の憐むべき学生を救わなければ実に恐るべき大怪事が起るであろう。何となれば彼等は化学の素養あり、医学を修めて居るから種々の危険物を造る事は訳ない事だから」と云われた位で、此の前途ある学生の救済は一日も忽にすべからざる重大事件であった。然も多くの社会人士は自ら其の渦中に投ずるを好まず、徒らに手を重ねて形成を觀望するに過ぎなかった。

高橋先生が老軀を提げて立たれてから一有半歳あらゆる艱難辛苦は一再ならず襲来し、あわや先生の目的の挫折するに非ずやと危まれた事一再



に止まらなかった。然し吾々が思う如く、然く先生の決心は弱きものでなかった。厳然として勇往邁進、唯初一念を飽迄貫徹すべく、常に最善の努力を惜まれず、東奔西走遂に今日の榮譽を勝ち得られたのである。

丁度認可の内命あった四月十一日の午後、学生は今日か明日かと唯福音の来るをば、一日千秋の思いして鶴首して居た。本部委員中本、江並、佐藤の三名と共に為す事なしの策碁に余念なき折り柄、先生の電話に本部員至急来れよとあった。此時此瞬間早「認可」の一言は電光石火脳底に響き渡り、期せずして万歳を連呼した。俗に云う親の死際にも間にあわぬと云われる囀碁も、此時を彼方のけ、取る物も取敢えず、足は宙を飛んで馳せつけた。而して確かに認可の来たりし事を知った時、全く自分は前後を忘れ、正気を失う迄歓喜したのである。然も雨降りの泥道を一目散に、我一番槍にと学校に馳せつけ、黒板に「認可来る」と大書して万歳を絶叫した。斯くして学校は成立した。正義は立派に通された。邪は正に敵し得なかった。吾々は此処に新なる光明に浴しながら、勝ちほこれる覇者として凱歌を叫ぶ身となった。郷里の父は書を寄せて曰く、君等が過ぎにし縲絏の辱も、今や青天白日となった。艱難は最善の母である。「君は父の子に非ず。国家の子たるものにて病を治する身に非ず、国家社会を治する身たれ。」と。又母は「最早父母兄弟を顧みる要なし。唯此後は高橋先生の御高恩を報ぜよ。」と。余は国家の為め、先生の為め、此身を捧げんのみ。今や学生は曾て経験した事のない、快樂の裡に嬉々として勉強する身となった。余も亦此の様に暢々とした心持となった事がない。誰に逢っても愉快的談ばかりである。最早敵もなく、愚痴もなく、不平もなく全く甦ったのである。終りに臨み、高橋先生の益々勇健ならん事を望む次第である。

#### あれやこれや 杉山白雨（泰治）

私共が長い間渴望して、今かいまかと待ち焦れて居った認可が愈々来たと云う内報を中本さんから聞いたのは、四月十一日の夕暮近くであった。

其時は只もう嬉しさがこみ上って胸が一杯になった。少しも早く此事を近隣の学友に知らせようと思って雨の降る中を高足駄で駆け出した。

折角開いた計りの桜の花片が、雨にしつとりと

濡れて紅を溶かした。花見の客が衣を汚して帰る者もある。「本当に来たのか」と莞爾として微笑む友の顔を見るのが、私には何よりの楽しみであった。

近い所には端書を出し、遠い知己には電報を打った。それから本部に行ってみれば、案の定大騒ぎをして居った。飲む。唄う。匆ねる。本部員全部はシャツもズボンもそっちのけ、後藤本部長を初めとして裸踊の真最中。心からの悦びが遺憾なく動作の上に現われていた。帳場で電話のベルが絶えず鳴る。会心の満足を得て帰り来り、寢床についたが中々眠られない。夫れか夫れかと考えて行く。三時の時計が鳴ったのもよく覚えている。

ああ過去二年間、吾々学生が血を啜り骨を削るような苦しい思いをして、今日まで奮闘を続けて来た甲斐あって、是れからは天下の学生として立派に名乗る事も出来るのだ。

自分が嘗て県主任であった関係上、一言申上げるが、無口にして而も徹底せる山形県人（十七名）諸兄よ。此の紛擾以来我県人からは一人の落伍者、変節漢を出さなかったことを衷心喜ぶと同時に感謝します。茲に於て吾人は、当初から自覚してやっていることを意味し、各自の意思が剛健な事を充分証明するに足りると思う。終りに吾校の前途を祝福する。

#### 一生一度の欣喜雀躍 小川 東洋

認可！認可！此の声は私の耳にはどんなに響いたであろう。其瞬間自分は、己を忘れて万歳と、叫ばざるを得なかった。四月十一日の、黄昏五時近くであった。

此の知らせをあわただしく斉して呉れたのは、寺師君であったが見ればお互に嬉しいのと、夢中で走って来ると息がはずんで、碌々口もきけなかったが、御目出度う！が互に交換されて、今文部省から高橋先生の御宅へ電話で内達があった、と云う事が苦しい口の中から吐き出された時には、もう言葉に何時か力が入って居た。

自分は早速宅を飛出して、友人にも知らせた。歓呼の声は、此処彼処に起った。全く痛快で、堪まらなかった。学校には、認可来るの掲示は既に、大書されてあった。翌日の官報には、東京医学専門学校認可の記事が其第一頁に書かれてあった。二年の歴史を辿って見ると、実に苦心惨憺した道

は、或は悲観又は樂觀と曲がりくねって、ありありと車の轍の様に其の跡を止めている。併し、吾々の正義は飽く迄貫徹されたのだ。嗚呼、今日は何と云う目出度い日であろう！吾々青年の、血湧き肉躍る、真の心の叫びは、彼の神聖なる血判状に依っても明らかなものである。実に吾々の団結は、清らかな美しいものであった。此団結と熱誠なる高橋先生はじめ諸先生の御同情に依て初めて今日、吾々は柳桜をこきませた東都の空で祝いの盃を酌み交わし前途の隆盛を祈ったのであった。

希くば、永劫に我が東京医専に幸あらん事を。祝杯と共に、高橋先生の御健康を祈ると共に吾々一同の健康と将来の成功を祈って置く次第である。

雑誌「国論」<sup>9)</sup>には高橋琢也の漢詩（自慰篇）や原敬（政友会総裁）、中小路廉（農商務大臣）らの祝辞が載せられてある。とくに以下の自慰篇ではすべての行の末尾が韻を踏んでいる<sup>10)</sup>。

東京医学専門学校得文部省認可 賦一韻到底  
以自慰

五木山人 高橋琢也

徳不孤兮必有鄰 一諾履信還戴仁 半千医生免酸辛  
救済事業茲始新 東奔西走秋又春 南船北馬往返頻 売地鬻屋抛宝珍  
何愁得失物外因 校舍欲成天災臻 狂風電馳掃粉塵 朝野紳士同気親  
再築奏功宿志伸 医鬻財団作法人 漸承官充慰老身 不屈不撓報国真  
終始貫徹一精神

学生風紀問題 立憲政友会総裁 原敬

東京医学専門学校は愈々高橋君の尽力に因って成立した。而して高橋君の尽力した事柄に就ては克く開知して居るが、其詳細に涉っては他に譲るとして、茲に私は言わぬが其苦心たるや決して尋常一様のものではない。高橋君が自己の財産を提供し東奔西走の結果多くの同情者を得、今日の成立を見るに至ったのであるから高橋君の為に祝すべきは勿論、国家の為に慶賀に堪えぬ次第である。

扱て茲に私は少しく学生に対する希望を述べて見よう。それは学校の風紀問題である。昔から医者の不養生、紺屋の白袴と称え、自ら衛生の任に

当る立場に居りながら其衛星に励めないばかりでなく、左様なことから宜敷ない評判があったのである。且つ其の害毒を社会に及ぼすという状態であったが、其の余弊が今尚残って居って、医学生は風儀が良くない如に言われて居るのであるから特に斯様な点には自ら充分に戒飾する必要がある（以下略）。

至誠に報ゆる至誠を以てせよ

農商務大臣 中小路 廉

至誠天地を動かし、人を感動せしむること、実に今も昔しも変りはない。嘗て種々なる変遷推移を経て、一時は如何なる事に立到るやも凶り知られなかつた東京医学専門学校が、高橋琢也君の非常なる努力に依って、今回都合好く文部省の認可も受けて茲に創立を見るに至ったのは、実に国家の為にも、社会の為にも此上無い慶事として大いに祝すべきことであると思う。（途中略）

今回、此学校の創立に就ては、実に至誠の化身である高橋琢也君にして先にも言うが如く、一身を挙げて、一家を挙げて昼夜 熄む無く奔走努力せられ、茲に此学校の創立を見るに至ったのである。人誰か其の誠意に感ぜざる者あろうか。去れば高橋君の此努力誠意に対しても、在校の学生諸君は飽迄も是に報いる誠意が無くてはならないものであると思う。果たして然りとせば、其誠意に報いるの第一の方法は何処までも此学校の信用を高めて済済たる人材を出し、医術界の大なる貢献者たる雄大なる志望が無くてはならない。是等の人物人材を輩出し、国家国民に貢献することが出来たならば、高橋君の満足も是に勝るものはなからうし、学生諸君も高橋君の厚意に対して感謝の意を表するの途は全く此外には出でないことであろうと思う。東京医学専門学校の為に喜びを述べると共に、希望の一旦を申し述べた次第である。

高橋琢也は医学専門学校が認可された大正7年4月11日以降も淡々と学校の発展に関わっていった。4月12日には早朝より文部省を訪れ、まず田所美治次官を訪問し感謝の意を伝えた。田所次官は高橋の進める東京医学専門学校設立を終始応援してくれていた。さらに、岡田良平文部大臣と松浦鎮次郎専門学校局長を訪問し謝辞を述べた。その日は喜び溢れる医学生達が大勢、高橋邸を訪問した。また、池

上作三（内科学）や国論社の佐藤貝村らがお祝いに訪れた。4月13日も学生達が大挙して訪れた。

高橋琢也日記・大正七年四月十二日 天気少し晴れ。八時より自動車にて田所、岡田、松浦学務。松原、井田外数人。来人、池上、学生大勢、毎夕新聞記者、佐藤貝村。土地会社感謝礼式百円也、鈴木久作。

四月十三日 雨ふり。外室なし。医生大勢。

4月14日は東京医学専門学校設立祝賀会が開かれた。その時の様子は写真6-8に残っている。夜に高橋琢也の子息・律人が4月17日の高橋富士子の3回忌法要の準備のため菩提寺を訪れている。

十四日 曇り。東京医学校祝賀会。医学生大勢万歳を唱う。行列門口にて。夜分、学生五六人。律人、寺へ行く。二十円也、寺へ経料。

4月15日は政友会に行き、原敬に面会するとともに、山本条太郎（政友会幹事）や小川平吉（政友会幹事長）を訪れ、東京医学専門学校評議員の承諾を頼んでいる。また、日本医学専門学校山根正次理事長を自宅に訪れている。この日訪れた原敬や後藤新平（内務大臣）は新医学校設立に関して終始高橋琢也を鞭撻してくれていた。

四月十五日 朝より山本（条太郎）、山根（正次）、落合、中村、原敬、後藤（新平）、小川平吉、評議員（山本入五百円也）。高橋秀（高橋琢也の長男）より入五十円。大正六年扶持。法事にて物入多。

四月十六日 終日静養。小柴菊（高橋富士子の妹）、国論社佐藤（貝村）、沖繩人大城。

4月17日は高橋琢也の妻・富士子の三回忌法要が行なわれ、家族一同集った。また、午後より山根正次を再び訪れている。金子堅太郎も上野での日本絵画頒布会や立教大学医学部設立問題では高橋琢也を終始応援してくれた。宮内省も同様であった。4月21日には高橋琢也の農商務省のかつての上司であり、終始応援をしてくれた武井守正男爵を訪問している。

四月十七日 富士子三回年にて。豊田夫婦、牛太郎夫婦、英人夫婦、まつ、かなえ、寺参り。午後より山根（正次）、金子（堅太郎）、宮内省。来人、松原、医学生四名。

四月十八日 晴天。午後より明治絵画会。来人、

大阪浜田、松原、竹下（文隆）、（高島）北海一枚渡す、交換。出香典弔円十為替、北海道送る。

四月二十一日 日曜日。杉山四五郎、美術倶楽部、谷川会葬。武井守正

4月22日は、三井重役であった早川千吉郎、三越創始者である朝吹常吉、久原財閥の総帥・久原房之助、ラサ島会社（社長は恒藤規隆）を訪れ、寄附の依頼を行なっている。東京府庁、東京市役所には東京医学専門学校承認に対する謝辞を述べるために訪れたのであろう。内務省には学生達の徴兵忌避問題で迷惑をかけたことから訪問したと考えられる。夜は築地の北野屋に農商務省時代の仲間、松波秀実、内藤確介、佐藤、和田彦次郎、田中、橋口、三浦らが集って高橋琢也の祝賀会を行なったようである。

四月二十二日 雨ふり。朝より早川（千吉郎）、朝吹（常吉）、加藤高明、松平直之、商業会議所、久原（房之助）、ラサ島会社、東京府、東京市役所、内務省。夕より築地北野や。来客、松波（秀実）、内藤（確介）、佐藤、和田（彦次郎）、田中、橋口、三浦。家へ来人、肥田、橋本徹馬、杉原。留守宅来人、伊藤連二名、官野、山本康尚。

4月29日も後藤新平内務大臣をはじめ、三井の総帥・団琢磨や王子製紙創始者・藤原銀次郎を訪問し、寄附の依頼を行なった。

四月二十九日 曇天。八時より自動車にて後藤内相、団琢磨、指田葬式、上野停車場、藤原銀次郎、上野松阪や下駄。展覧会望む。夜に至り、医学生。竹下、松原。絵画九十六本売代残金入金全部相済み。

高橋琢也は4月12日に文部省より正式に東京医学専門学校認可の書類（写真4）が届いたことから、4月15日には私立日本医学専門学校の山根正次理事長を訪問している。高橋琢也は山根正次に一連の迷惑に対するお詫びを伝えたかったのであろう。その日のみならず、4月17日にも山根正次を訪問している。訪問によって山根正次に会えたかどうかは定かではない。また会えたとしても、どのような会話がなされたのであろうか。この月に、山根正次は日本医学専門学校理事長を、磯部検蔵理事とともに辞任した。当時、日本医学専門学校は大きな負債を

抱え破産寸前の状況であったが、中原徳太郎、塩田広重、小此木信六郎らが理事となって立て直しに奔走した結果、蘇ることとなった。大正8年には医師国家試験無試験資格を文部省より承認され、さらに大正15年に日本医科大学として大学への昇格が承認された。その後の発展は良く知られているとおりである<sup>11)</sup>。

高橋琢也の前に大きく立ちはだかっていた松浦鎮次郎はその後、「大学令」制定のために尽力し大正7年にそれを成立させた<sup>4)12)</sup>。これは第二次大戦前の我国の教育改革における最大の成果であるといわれている。しかし、大正8年に高橋琢也の親友・中橋徳五郎が文部大臣に就任すると、朝鮮に左遷され京城大学総長となった。さらに昭和4年より九州帝国大学総長として福岡に赴任した。松浦鎮次郎はその後いつしか、高橋琢也の真意を理解するようになり、東京医学専門学校の発展に協力することとなった。高橋琢也の葬儀（昭和9年）には遠路、福岡より参列した。また、昭和10年からは松浦が東京医学専門学校の「評議員」に加わっていることは特記すべきことであろう。これらのことから松浦鎮次郎の高橋琢也に対する気持ちの大きな変化がうかがわれる。松浦鎮次郎は九州帝国大学総長を6年勤めたが、学生の軍事教練を排除するなど名総長として尊敬を集め、現在の九州大学には銅像が残されている。

高橋琢也が東京医学専門学校設立にかけた熱意や、高橋の「誠実」と「仁愛」の信条はわが国の多くの指導的立場の人達を動かしていった。また、高

橋琢也が東京医学専門学校の学生達に注いだ愛情はその後巣立った医学生達の心底にまで届き、東京医学専門学校や現在の東京医科大学の発展の礎となっていた。（以下、次稿に続く）

## 文 献

- 1) 友田燐夫：高橋琢也と学生達（4）（上）東京医科大学雑誌 69 巻 1 号 22-54, 2011
- 2) 東京医科大学同窓会（編集：原三郎）：本部会記録（復刻版）1966 年
- 3) 高橋琢也：高橋琢也日記（大正5年～昭和3年）（東京医科大学歴史史料室保存）
- 4) 友田燐夫：高橋琢也と学生達（4）（中）東京医科大学雑誌 69 巻 2 号 184-209, 2011
- 5) 唐木秀夫：思い出すまを。東京医学専門学校雑誌（高橋琢也追悼号）70-79, 1935
- 6) 東京医科大学同窓会編：東京医科大学五十年史。1971
- 7) 長委三美：東京医科大学開学の礎（東医の礎）。東京医科大学刊、2008 年
- 8) 東京医科大学校歌（ヒポクラテス）第三番：威を官学の名に借らず ただこれ力 誠より 湧きくる励、身を駆りて わが天職にころろごし 三たび肘折る跡追わん。
- 9) 国論（東京医学専門学校創立記念）4 巻 8 号、1918
- 10) 佐藤久男：随想・高橋琢也先生創学の賦 p6-9, 2001
- 11) 日本医科大学：日本医科大学十五年記念誌。昭和 15 年
- 12) 天野郁夫：大学の誕生（上）（下）。中公新書、中央公論社、2009 年